

尼崎市

東 武 庫 遺 跡

県公営住宅尼崎武庫之荘団地改築に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1991年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、県公営住宅尼崎武庫之荘団地の改築に先立ち、兵庫県都市住宅部住宅建設課の依頼を受け、兵庫県教育委員会が昭和63年度、平成元年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書では、方位については全て磁北で示した。なお、磁北は真北（T.N.）に対してN 6° 20' W（昭和55年）である。
3. 本書に示したレベルは、全て東京湾平均海水準（T.P.）が基準である。
4. 本書に使用した実測図は、調査員と嘱託職員とで作成したもので、遺構写真は調査員が撮影し、遺物写真は株式会社サンスタジオに撮影委託したものである。
5. 本文の執筆分担は、以下のとおりである。

第1章第1・3・4節、第4章第1節4、第5章第3節、第6章……………岡田章一
第1章第2節……………村上賢治
第2章、第3章、第4章第1節1～3・5、第3・4節、第5章第1・2節…中村 弘
第4章第2節……………山本 誠
6. 本書の作成には調査員と嘱託職員があたり、中村が編集した。
7. ①第2章 地理的・歴史的環境で使用した「図3 遺跡分布図」は、昭和59年に国土地理院が発行した1/25,000地形図「大阪西北部」「伊丹」を基礎とし作成した。
②第5章 遺構・遺物の検討で使用した「図22 遺跡分布図（弥生時代前期）」は、明治44年に大日本帝国陸地測量部地形図（『尼崎市史』第3巻付図1）を基に作成し、「図23 字図及び条里復原図」、「図24 方位関係図」は、『尼崎市史』第1巻を基に作成した。
8. 木器の樹種同定について、島地謙（京都大学名誉教授）、林昭三（京都大学木材研究所）の両氏に同定を依頼し、玉稿を賜った。記して感謝の意を表したい。
9. 調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々に御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

岡田務、橋爪康至、福井英治、益田日吉（以上、尼崎市教育委員会）、前田佳久（神戸市教育委員会）（順不同、敬称略）

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 確認調査の経過	3
第3節 全面調査の経過	6
第4節 整理調査の経過	6
第2章 地理的・歴史的環境	7
第3章 調査結果	11
第1節 概観	11
第2節 屈序	14
第3節 遺構と遺物出土状況	15
1. 弥生時代	15
2. 奈良・平安・鎌倉時代	16
第4章 出土遺物	21
第1節 土器	21
1. 弥生土器	21
2. 須恵器	23
3. 土師器	27
4. 陶磁器	29
5. その他	29
第2節 石器	30
第3節 鉄器	31
第4節 その他	31
第5章 遺構・遺物の検討	33
第1節 弥生時代	33
第2節 奈良時代後半から平安時代初頭	36
第3節 平安時代中期から鎌倉時代前期	38
第6章 まとめ	40
附録 東武庫遺跡出土柱材の樹種	41

挿 図 目 次

図 1 確認調査平面図.....	4
図 2 位置図.....	6
図 3 分布地図.....	9
図 4 調査区平面図.....	10
図 5 上層断面図(1).....	12
図 6 土層断面図(2).....	13
図 7 遺構実測図（4区弥生時代）.....	15
図 8 遺構平面図.....	17・18
図 9 遺構実測図（掘立柱建物）.....	19
図10 柱穴・ピット断面図.....	20
図11 出土遺物実測図（弥生土器(1)）.....	21
図12 出土遺物実測図（弥生土器(2)）.....	22
図13 出土遺物実測図（須恵器(1)）.....	24
図14 出土遺物実測図（須恵器(2)）.....	25
図15 出土遺物実測図（土師器(1)）.....	26
図16 出土遺物実測図（土師器(2)）.....	28
図17 出土遺物実測図（陶磁器、その他）.....	29
図18 出土遺物実測図（石器）.....	30
図19 出土遺物実測図（鉄器、その他）.....	31
図20 出土遺物実測図（柱）.....	32
図21 4区 弥生土器出土状況推定復原図.....	33
図22 遺跡分布図（弥生時代前期）.....	35
図23 字図及び条里復原図.....	37
図24 方位関係図.....	37

表 目 次

表 1 遺跡地名表.....	8
表 2 弥生土器観察表.....	45
表 3 須恵器観察表.....	46
表 4 土師器観察表.....	49
表 5 緑釉陶器観察表.....	53
表 6 白磁観察表.....	53
表 7 黒色土器・瓦器観察表.....	53

写 真 目 次

写真1 第2次確認調査全景（東より）	3
写真2 1トレンチ（北より）	3
写真3 2トレンチ（西より）	5
写真4 2トレンチ 柱穴断面	5
写真5 3トレンチ（東より）	5
写真6 木材顕微鏡写真	43

図 版 目 次

図版1 上) 調査区全景（北東より）	下) 1区 遺構検出状況（南より）
図版2 上) 1区 ピット21（北より）	下) 1区 土層堆積状況（東南より）
図版3 上) 2区 遺構検出状況（南西より）	下) 2区 捩立柱建物検出状況（北より）
図版4 上) 2区 柱穴4, 5 断ち割り（南西より）	下) 2区 柱穴13 断ち割り（南より）
図版5 上) 2区 遺物出土状況(70.76.87:西より)	下) 2区 土層堆積状況（西より）
図版6 上) 3区 全景（北より）	下) 3区 土層堆積状況（北東より）
図版7 上) 4区 遺構検出状況（南より）	下) 4区 壺(1)出土状況（北より）
図版8 出土土器(1) (弥生土器)	
図版9 上) 出土土器(2) (弥生土器)	下) 出土土器(3) (弥生土器)
図版10 上) 出土土器(4) (弥生土器)	下) 出土遺物・石器 (弥生時代)
図版11 出土土器(5) (須恵器・土師器)	
図版12 上) 出土土器(6) (須恵器)	下) 出土土器(7) (須恵器)
図版13 上) 出土土器(8) (須恵器)	下) 出土土器(9) (須恵器)
図版14 上) 出土土器(10) (須恵器)	下) 出土土器(11) (土師器)
図版15 上) 出土土器(12) (土師器)	下) 出土土器(13) (土師器)
図版16 上) 出土土器(14) (綠釉陶器)	下) 出土土器(15) (白磁)
図版17 上) 出土遺物・壺	下) 出土遺物・鉄器
図版18 上) 出土遺物・土錐、砥石	下) 出土遺物・柱

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

県営住宅の老朽化に伴って、兵庫県都市住宅部住宅建設課では、それらの改築計画を進めてきた。特に阪神間及び神戸市の人口密集地域の住宅については、その高層化がはかられており今回調査を実施した県公営住宅尼崎武庫之荘団地もその一環として行われたものである。

調査は、昭和63年度、平成元年度の2年度に、3次にわたって行われた。

第1次調査は昭和63年11月14日に行われ、敷地内に坪を5ヶ所設定して行われ、その結果、住宅建設用地内に遺跡の存在することが確認された。

第1次調査の結果を受けて、平成元年6月27日から7月3日にかけて、第2次確認調査が実施された。調査はトレーナーを敷地内に3ヶ所設定して行われ、その結果、遺構は住宅建設予定の南半分を中心に存在する事が確認された。

以上の確認調査の結果をもとに県教育委員会では当該住宅予定地について全面調査を実施することとし、平成元年11月13日から12月18日までの約1ヵ月間調査を実施した。さらに、調査の結果を公開すべく整理作業を進め、翌年の平成2年4月から9月にかけて、これを行った。

第1次確認調査・第2次確認調査・全面調査・整理調査の調査体制については、それぞれ以下の通りである。

(1) 第1次確認調査

調査事務

兵庫県都市住宅部住宅建設課

調査担当

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 技術職員

久保 弘幸

(2) 第2次確認調査

調査事務

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 所長

大江 周

副所長兼調査第2課長

村上 純揚

総務課長

小池 英隆

主査

池田 正男

調査担当	技術職員	村上 賢治
	技術職員	藤田 淳

(3) 全面調査

調査事務

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	所長	大江 開
	副所長兼調査第2課長	村上 紘揚
	総務課長	小池 英隆
	主査	池川 正男

調査担当	主任	岡田 章一
	技術職員	中村 弘

(4) 整理調査

調査事務

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	所長	内田 隆義
	副所長	村上 紘揚
	整理普及課長	松下 勝
	主査	加古千恵子
	技術職員	岸本 一宏
	技術職員	別府 洋二

調査担当	主査	岡田 章一
	技術職員	中村 弘
	嘱託職員	前田 陽子
	嘱託職員	和田寿佐子
	嘱託職員	中田 明美

第2節 確認調査の経過

県営住宅の老朽化に伴って、兵庫県都市住宅部住宅建設課では順次建替計画を進めており、この計画に伴って県公営尼崎武庫之荘団地も低層住宅から9階建ての高層住宅へと建替えられることとなった。埋蔵文化財の有無についての照会が、同課から兵庫県埋蔵文化財調査事務所にあり、それに基づいて2度の確認調査を実施した。

なお、第2次確認調査を実施するにあたっては、地元自治会が日照権等の問題で高層住宅建設に対して反対運動を行っていたため、事前に協議し、埋蔵文化財の調査に関しては了解を得た。

第1次確認調査（昭和63年11月14日）

調査は、兵庫県都市住宅部住宅建設課が作業員・機械などを用意し、埋蔵文化財調査事務所は職員を派遣して実施した。

調査の方法は、バックホーで掘削し、遺構・遺物が検出された時点で人力により壁面及び平面の精査を行うものであった。県営住宅の敷地内に遺跡が存在するかどうか確認するため、5箇所（P1～P5）を掘削し精査を行った結果、P2で柱穴が認められ、またP5では南北方向の溝状の遺構を褐色砂質上面で検出した。以上から、住宅建設用地内に遺跡の存在することが確認された。

第2次確認調査（平成元年6月27日～7月3日）

第1次確認調査の結果を基にして、遺跡の範囲・性格をより詳細に判断するため、第2次確認調査を実施した。調査は、兵庫県都市住宅部住宅建設課からの委託によるものである。

調査の方法は前回と同じで、バックホーでの掘削と遺構・遺物が検出された時点での人力に

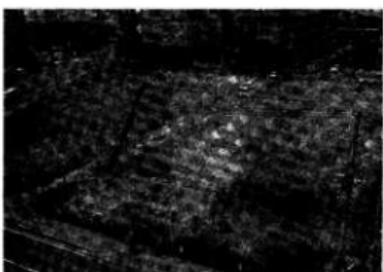


写真1 第2次確認調査全景（東より）



写真2 1トレンチ（北より）

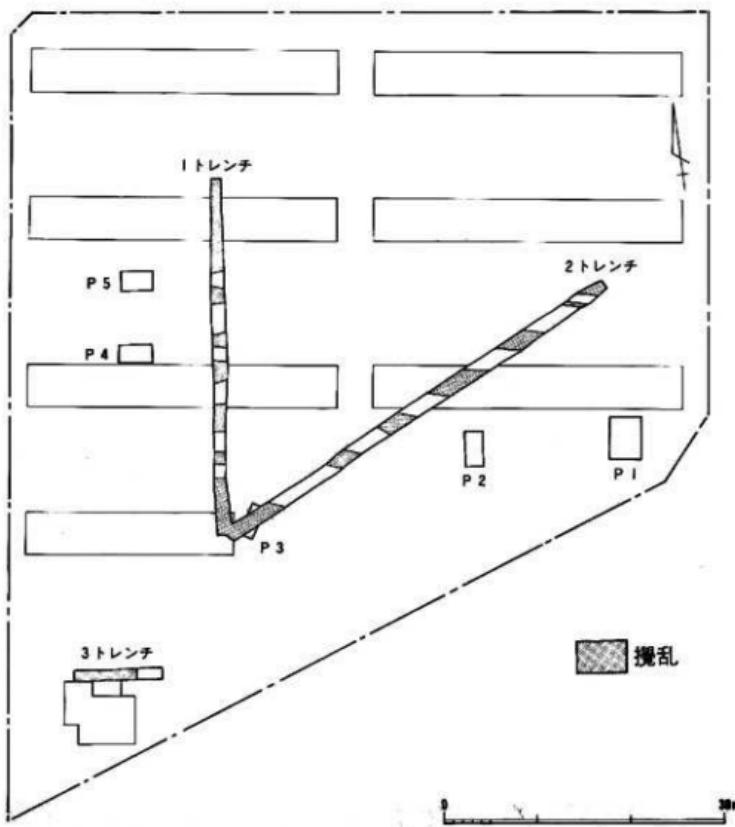


図1 確認調査平面図

よる壁面及び平面の精査を実施した。調査の結果、第2次調査の範囲内では、旧住宅の設備（水道・下水道・住宅基礎等）で約5割が破壊されており（図1 網掛け部分）、いわゆるガラが堆積しているのみであった。しかし、5割の残存している面からは柱穴・遺物を検出した。

住宅建設用地内では、擾乱によってトレーニングの土層が分断されており、各トレーニングにおける土層関係を結びつけるのは困難であったが、全体的に見ると、北側から南側へ緩やかに傾斜した砂礫層が基礎を形成している。南側の基礎の低くなった部分では、この砂礫層の上に第9層黒褐色粘質土が堆積しており、やや安定した面を形成している。遺構はこの面を切り込んで作られているが、遺構の埋土は周辺の土壤と似ており、検出には困難が予想された。1・2トレーニングとも同様な土層堆積状況を示している。3トレーニングは、当初予定していなかったが、1・2トレーニングの南端が擾乱を受けていたため、住宅建設範囲の南西端の状況を確認するために追加設定したトレーニングである。西半分は旧建物基礎のため擾乱を受けていた。

確認調査の結果、遺跡は県営住宅の敷地全域に広がるものと思われた。その中でも地盤の安定した南半分を中心に遺構が存在する可能性が強く、全面調査が必要との判断を下した。なお遺跡の時期は平安時代頃で、遺構面は1面のみと推定された。



写真3 2トレーニング (西より)



写真4 2トレーニング 柱穴断面



写真5 3トレーニング (東より)

第3節 全面調査の経過

先に行われた確認調査の結果に基づいて、県教育委員会では、当該地域の内、新団地の建設予定部分約1,600m²について全面調査の必要性を認め、平成元年11月13日より調査を実施することとなった。

調査期間は平成元年11月13日から12月18日までである。確認調査の結果、現地表から深さ50cmにわたって、旧住宅建設時の盛土及び、旧住宅建設以前の旧耕作土が堆積することがわかっている。今回の調査では、盛土及び旧耕作土については、機械により掘削し、その下に堆積する遺物包含層以下については、人力掘削を行う事とした。

調査区の設定にあたっては、新住宅の配置に従って、大きく調査区を1～4の4区に分割した。

造構の実測にあたっては、1/20スケールを基本としたが、柱根等については、1/10スケールで実測した。断面図作成にあたっては、1/20スケールで実測を行った。ただし、報告書掲載に際して、横1/100、縦1/10スケールのものに書き改めた。

今回の調査の結果、調査区は、旧住宅の基礎、配管及び旧住宅の取り壊しの際の掘り込み等によって、全地域にわたって擾乱を受けていたが、少なくとも、弥生時代前期、奈良時代後半から平安時代初頭、平安時代中期から鎌倉時代初頭の3時期にわたる遺構が検出された。

第4節 整理調査の経過

整理調査は、平成2年4月より開始し、水洗い、ネーミング作業は魚住分館で、接合、復元、実測、トレース、レイアウト、写真撮影の各作業は荒田町の埋蔵文化財調査事務所で実施し、9月末までに原稿執筆を含めた全作業が終了した。

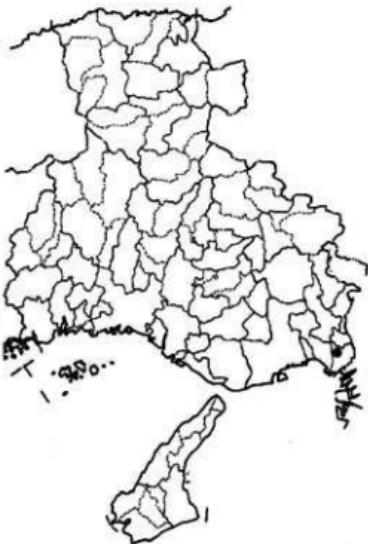


図2 位置図

第2章 地理的・歴史的環境

東武庫遺跡は兵庫県尼崎市武庫町51、52に所在し、尼崎市の西側、西宮市との境を流れる武庫川から東へ約1km、旧国名は攝津国で、その中でも西側にある西摂地域に位置する。

周辺の地形は、北側に北摂山地、東側に千里丘陵、西側に六甲山地と3方から囲まれ、南側は大阪湾に臨んでいる。尼崎市域は、北寄りの一部が洪積層からなる伊丹段丘、その他の大部分は、武庫川、猪名川、淀川とその分流によって形成された南北約8km、東西約6kmの沖積層の平野の一部を占めている。その内、本遺跡と関係が深い武庫川は、水源地を丹波篠山盆地南の山中とする先行性河川で、全長約65km、篠山盆地、三田盆地を経て、宝塚市域で平野部へと出る。豊かな土砂を供給し、縄文時代以降大阪湾に広大な三角州を形成し、現在天井川として南流している。弥生時代には現在の庄下川付近を流れていたことが、地理学、及び考古学から裏付られており、古墳時代以降に現在の地に落ち着いたようである。しかし、その後も氾濫を繰り返していたらしく、中世以来の「荒川」「砂川」等の別称がその状況を表している。

当地域の歴史的発展を考える上で重要な意味をもつのは、縄文海進以降、徐々に海平面が低下し、また沖積作用によって平野が形成されてゆく過程において砂州を形成していることである。それが数本の帯状の微高地となり、現在も地表面にその痕跡を留めている。この砂州と、武庫川の自然堤防等の微高地の形成が、人々に安定した生活の場を与えてきた。

東武庫遺跡は武庫川によって形成された微高地に立地し、弥生時代の推定海岸線からは約2km、奈良時代の推定海岸線からは約4kmの距離に位置している。

尼崎市内における遺跡は、主に猪名川流域、武庫川流域、及び臨海部に大別されるが、武庫川が前述のように氾濫を繰り返していたため、その流域において人々の居住をゆるす安定した場所を提供しなかったようである。

このような場所に初めて人が進出したのは、縄文時代晚期の滋賀里III式からV式の頃であり、猪名川川床遺跡、藻川川床遺跡、若王寺遺跡、上ノ島遺跡、田能遺跡から若干ではあるが、この時期の遺物が出土している。弥生時代前期（第I様式）の遺跡は、この縄文時代晚期の遺跡の所在地とはオーバーラップしており、比較的その内容が明らかになっている上ノ島遺跡、田能遺跡のほか、散布地として遺物の出土のみが知られる猪名川川床遺跡、藻川川床遺跡等がある。特に、上ノ島遺跡は第I様式でも古段階から続く遺跡であるとの指摘がなされており、西摂地域の弥生文化受容の様相を知る上で貴重な資料を提供している。しかし、前期のみの単純遺跡であり、継続して営まれる遺跡ではない。この現象は、庄下川（旧武庫川）流域においては特に珍しいものではなく、あるいは氾濫という自然条件に左右される要因が大きく存在したためかもしれない。そのためか、弥生時代中・後期にいたっても明確な遺構に伴って遺物が

出土した遺跡が少なく、北裏遺跡、武庫の荘遺跡等が知られるのみである。それに比較して猪名川流域では田能遺跡が前期から後期まで存続しており、安定して存続していたことが窺える。

古墳時代にはいると、沖積地であるにも拘わらず、密集・爆發的とは言えないまでも、多くの古墳が築造されたようである。現在は消滅しており詳細は不明であるが、武庫川流域だけ見ても、現在確認されている古墳として4世紀後半の水堂古墳（全長60m・前方後円墳）、須恵器片が採集された大井戸古墳（全長45m・前方後円墳）があり、現在その痕跡、あるいは伝承のみ伝えられている古墳として、猫山古墳、友行古墳、浅掘古墳、座頭塚古墳、一本松古墳、東車塚古墳、阪塚古墳、琵琶塚古墳がある。また、古墳以外の注目すべき遺跡として、若王寺遺跡及び下坂部遺跡がある。ここでは製鉄関係の遺物が溝内から土師器・須恵器と共に出土している。

古代から中世にかけては、白鳳時代に建立された猪名寺廃寺、それとの関係が指摘されている中ノ川遺跡、平安時代を中心として奈良時代から鎌倉時代にいたる若王寺廃寺などをはじめ、集落跡である金樂寺貝塚遺跡、辰巳橋遺跡、西川遺跡などが明らかになっている。また、辰巳橋、西川、下坂部、瀬江字東大寺等の遺跡からは奈良時代末期の軒瓦が出土しており、当地域周辺に寺院、役所、倉庫等の建造物が存在したことが窺える。辰巳橋遺跡からは宋代の舶載の白磁・青磁も出土している。しかし、寺院跡以外の奈良時代の遺跡は、中ノ田遺跡から8棟の掘立柱建物が検出された以外は遺物のみが出土し、遺構に伴っていないため検討の余地を残している。その他の遺跡としては古墳時代終末から歴史時代にかけての土師質土器を焼成した額田麻跡がある。また、東武庫遺跡の所在する近くには武庫の荘という地名が残っているが、この地名は鎌倉時代から戦国時代を通じて存続した荘園名であり、本遺跡との関係も指摘しうるものである。

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	東武庫遺跡	11	中嶋遺跡	21	東富松遺跡A	31	桂木遺跡
2	宮ノ北遺跡	12	道ノ下遺跡	22	東富松遺跡B	32	一本松古墳
3	北裏遺跡	13	南吹上遺跡	23	富松城跡	33	水堂古墳
4	三良田遺跡	14	南戸板遺跡	24	赤田遺跡	34	東車塚古墳
5	上カンデ遺跡	15	東柿ノ木遺跡	25	武庫中学校遺跡	35	阪塚古墳
6	猫山古墳	16	武庫の荘遺跡	26	西貝原遺跡	36	辰巳台遺跡
7	東浦遺跡	17	浅堀古墳	27	大井戸古墳	37	栗山・庄下川遺跡
8	時友遺跡	18	庄ノ内遺跡	28	武庫南部遺跡		
9	友行古墳	19	四方田遺跡	29	久保田遺跡		
10	南城越遺跡	20	座頭塚古墳	30	上ノ島遺跡		

表 I 遺跡地名表

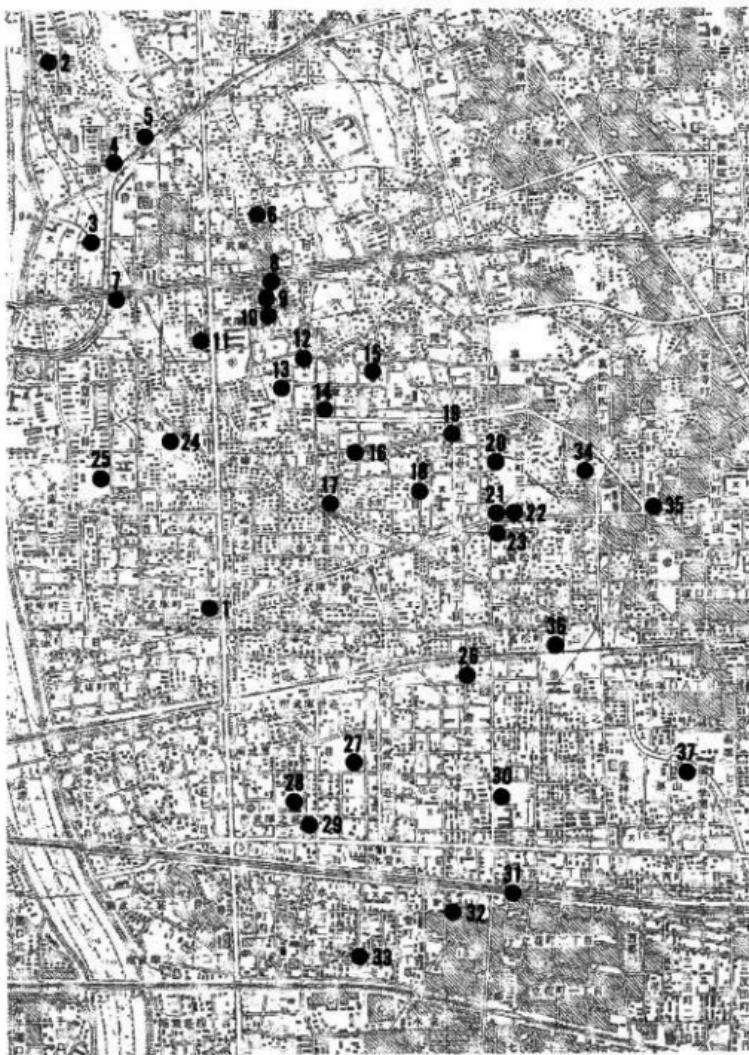


図3 分布地図 (1/25,000)

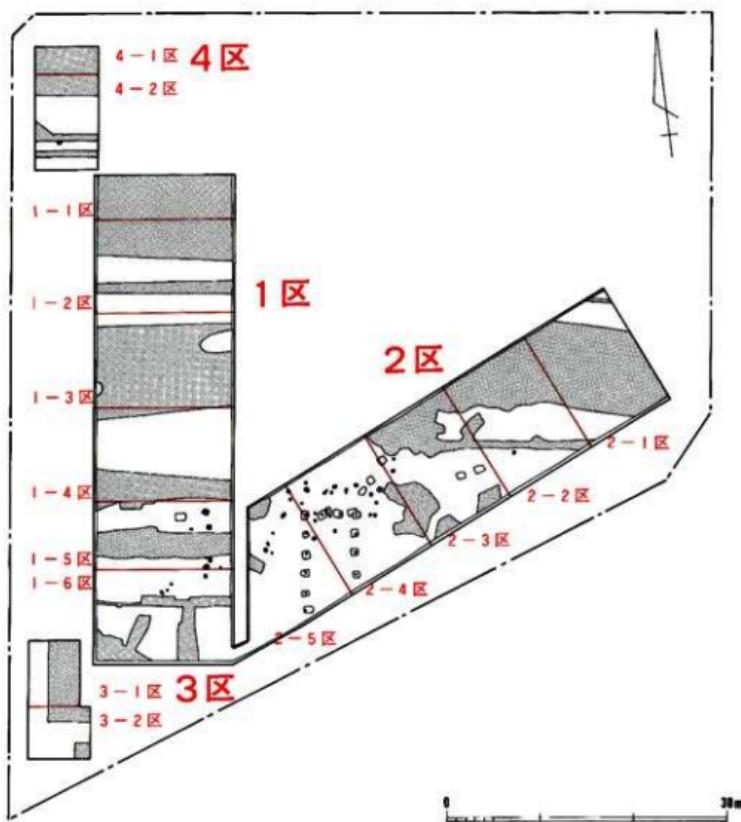


図4 調査区平面図

第3章 調査結果

第1節 概 観

今回の調査地は住宅地の配置により大きく分けて4つの地区に分かれる。そのうち南北に長い地区を1区、東北から南西にかけて長い地区を2区、南西隅の小区を3区、北西隅の小区を4区とする。さらに、1、2区を10mごとに分け、北方から順に番号を与え、1区を1-1区から1-6区までの6つに、2区を2-1区から2-5区までの5つに小区分する(図4)。調査区内は全地区において、以前の宅地と上下水道により大きく擾乱され改変が著しいが、遺構・遺物はその間を縫うようにして残存していた。また、旧地形は北へ上がる程高くなっている、4区ではその後の削平によって、弥生時代の遺構が上部を削平されながらも辛うじて残存していたという状況である。

今回確認された遺物は、年代別に大きく分けて、弥生時代、古墳時代、奈良時代から平安時代、平安時代から鎌倉時代の4時期にまたがっている。そのうち古墳時代を除く3時期は明らかに遺構に伴っており、当該期において当地に人間の営みがあったと考えられる。

弥生時代の遺構は4区においてのみ検出された。遺構は弥生時代前期における微高地の東南部に当たるようで、恐らくは弥生時代前期の壇場であろうと考えられるが、前述したように、擾乱のため詳細は不明である。4区以外には当該期の遺構は確認出来ず、1区において砂礫層に包含されたかたちで前期・中期の遺物が出土しており、2区において土器片及び石器が若干出土したのみである。

奈良時代の後半頃までには、1区、2区の南側において微高地間を埋めるようにシルト質の土層が堆積しており、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構は、主にこの層において検出された。遺構は大きくみて、方形の掘り方をもつ大形の掘立柱建物1棟と、その周囲に一部切り合ひながら散在するような小ビット群とに分けられる。その時期は、遺物の出土状況、遺構の切り合ひ関係等から判断して、前者が奈良時代後半から平安時代初めにあたり、後者は平安時代後半から鎌倉時代初めにあたると思われる。しかし、擾乱、削平のため層位的な検討が出来ず、検出面も同じであるため、個々のビットについての時期別の認識は不可能であった。掘立柱建物は、ほぼ南北方向を向き、3間×5間であるが、桁方向は調査区外へ延びるため不明である。小ビット群の中には骨片が出土したものがあり、柱穴でないものもあるようである。

遺物はコンテナに十数箱出土しており、その内訳は土器類が主で、弥生土器・須恵器・土師器・縁釉陶器・黒色土器・瓦器・白磁等である。他には、石器・土鍤・砥石・鉄器が出土した。また、掘立柱建物を構成する柱穴の内、2つには柱が遺存していた。

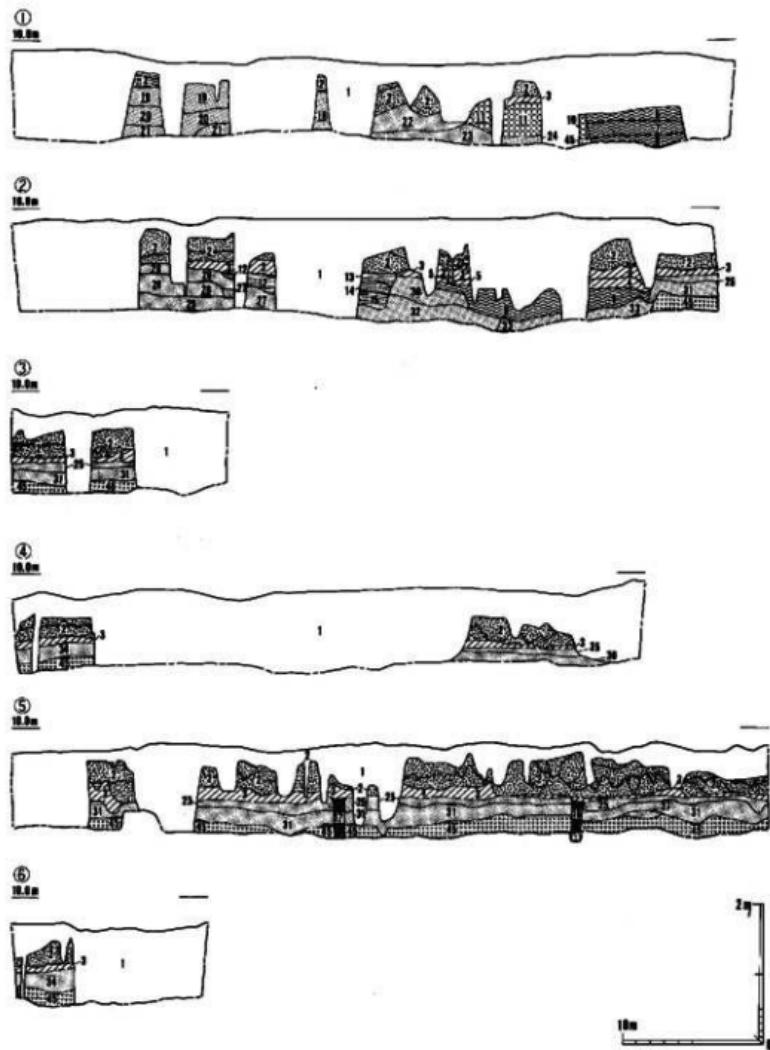
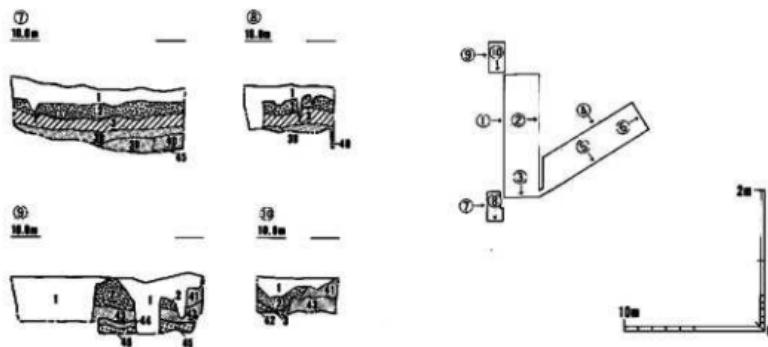


図5 土層断面図(1)



1. 硬土
2. 噴灰色シルト層
3. 明黄褐色シルト層
4. 噴黃褐色砂混りシルト層
5. 黄褐色砂層
6. 噴灰褐色砂混りシルト層（遺物包含層）
7. 噴黑褐色シルト層（遺構層）
8. 黑灰色砂混りシルト層
9. 黑褐色シルト層（遺構層）
10. 灰色砂層
11. 噴褐色砂質層（供生土鉱物含層）
12. 黑褐色砂質層
13. 灰色砂混りシルト層
14. 黄褐色砂混りシルト層
15. 噴灰褐色砂質層（柱穴堆土）
16. 噴灰褐色砂質層（柱穴堆土？）
17. 噴茶褐色砂質層
18. 噴茶褐色砂質層
19. 噴茶褐色砂質層
20. 噴茶褐色砂質層
21. 灰色砂層
22. 黑灰色砂層
23. 噴赤褐色砂質層
24. 茶褐色砂層
25. 黑褐色シルト層（遺構層）
26. 黄褐色砂層
27. 黑灰色砂質層
28. 黑灰色砂層
29. 噴灰色砂層
30. 噴灰色砂層
31. 噴灰褐色砂質層
32. 噴黑褐色砂質層
33. 噴黑褐色砂混りシルト層
34. 灰褐色砂質層（35と同じ？）
35. 灰褐色砂質層（しまり無い、透視図）
36. 噴黑褐色砂質層
37. 噴黑褐色粘土層
38. 噴色砂層（厚3cm）
39. 噴灰褐色砂質粘土層
40. 砂層（厚3～5cm）
41. 黑褐色砂質層（遺物含む）
42. 黄褐色砂質層（マンガン含む）
43. 噴褐色砂質層（遺構層）
44. 黄褐色砂混り砂質層（しまり無い）
45. 黑色砂層

図6 土層断面図(2)

第2節 層序

後世の擾乱のため全体の把握は困難であるが現状において確認できたことについて記述する。

第2章でも述べたように、当遺跡は武庫川の影響を多分に受けており、層序においてもそれを考えずして理解することは不可能な様相を呈している（図5、6）。

今回の調査範囲で層位的に最も低いのは灰色系の砂層(45)である。この層からは湧き水があり、1区の南端、2区の南及び東側、3区南側、4区南側において確認されている。標高は現状での最高所で4区南側のT.P.8.54m、最低所で3区南側のT.P.8.14mであり、1区中央部が僅んで確認出来ないものの、全体的には南側から北側へと高くなっている。特に北側の4区には、砂層の上へさらに暗褐色砂質土(43)が堆積しており、4区西側半分において微高地の東端部が確認できた。この微高地を形成する暗褐色砂質土(43)は弥生時代前期の遺構によって切られていることから、それ以前の堆積であることがわかる。次に、同じく北側から南側に向かって、灰色・褐色系の比較的大きな礫を多く含んだ層(10、11、26~32)が平均厚さ約40cmで堆積している。その一つである1区西側断面に見られる暗褐色砂礫層(11)は弥生時代中期の遺物を包含しており、これら砂礫層が弥生時代以降のあまり時期を隔てない頃の堆積によるものと考えられる。また、1区東側断面②に見られるような暗黒褐色疊混リシルト層(33)に若干被さる暗灰色砂礫層(31)も存在し、南側から北側へと形成される層も一部に認められる。このようにして北側と南側に微高地が形成される。この暗灰色砂礫層(31)は、2区及び1区南側に広範囲に安定して認められる。その後、この2つの微高地による相対的高低差を埋めるように黒褐色シルト層(9)が堆積する。この時点では比較的大形の礫を含む砂礫層の堆積は終わったと考えられ、代わりに3区全体に見られるような広範囲に渡る安定した層の堆積が始まる。黒褐色シルト層(25)・黄色系シルト層(3)・灰色系シルト層(2)がそれにあたり、後ろ2者はほぼ調査区全体を覆っている。ただし、微高地の痕跡は留めていたようである。また、黒褐・灰褐色シルト層(25~35)には奈良時代から鎌倉時代の遺構が切り込まれており、それ以下の層からは遺物が出土していないことから、この層は奈良時代以前の堆積であると考えられ、鎌倉時代の遺構も同一面で検出されていることから、奈良時代以降厚く大きな層の堆積はなかったものと考えられる。

以上のように、擾乱、削平が多いため詳細に検討することが不可能であったが、全体の様相についてまとめると、①弥生時代前期の微高地の存在、②礫を多く含む砂礫層の堆積、③1区及び2区南側における微高地の存在、④奈良時代以前の高低差を埋める広範囲で安定した層の堆積。これらは①から④へと年代を追って進行したものであるが、その状況から武庫川の影響による堆積であることが窺え、奈良時代には当地は安定していたようである。ただし、弥生時代前期における4区以外の状況と、②の礫を多く含む砂礫層の堆積状況などは、擾乱・削平のため遂に判明することができなかった。

第3節 遺構と遺物出土状況

1. 弥生時代

弥生時代の遺物は、1、2、4区から出土しているが、遺構に伴うものは4区だけで、他の地区から出土したものは包含層から出土し、他地から流されてきたものであると考えられる。

4区からは、前期の壺が掘り方をもって据えられた状況で出土している(図7)。上部の殆どが削平され、また、すぐ際は水道管により搅乱されるため、詳細は不明であるが、旧表土である灰色シルト層の下の黄色シルト層の直下から検出された。検出時においては一部残っていた暗褐色砂質土層とその下層の淡灰色の砂層を掘り込んでいるのが確認された。掘り方は、平面形が梢円形に、底が平らに掘られており、現在で長径約100cm、短径約60cm、深さ約17cmを測る。壺(図11)は長

径に沿って据えられ、端から順に暗褐色砂質土、淡灰褐色砂質土、暗褐色粘質土と埋められた様である。土器の復元の結果、口縁をほぼ横に向けた横位に据えられていたことが判明した(図21)。また検出時における最下部(壺の最大径の部分)には不整形に打ち削られたような穿孔があり、焼成後、壺を埋めるまでに開けられたようである。

4区は、本来調査区全体の中での最高所であったと考えられる。層位的には搅乱のため明確にし得ないが、弥生時代の遺構が、旧表土直下において検出されたことから明らかであろう。また、4区東西断面においては暗褐色砂質土、茶褐色砂質土が東へ行くに従って下がってきていることから、壺は、微高地の東端部に埋設されたと考えられる。

1区からは同じく弥生時代前期の壺、甕と中期の壺が暗褐色砂質土層に包含された形でまとまって出土している(図12-2~10)。前期の遺物は比較的残りがよいのに対し、中期の遺物はかなり磨滅している。前期の遺物に関しては恐らく武庫川上流にあたる北方の微高地から流れ込んだものと思われるが、層的な対応は不可能であった。

2区からは、黒褐色シルト層上から底部の破片が出土した他、黒褐色シルト層内から槍状石器、削器等が若干量出土している(図18)。黒褐色シルト層が弥生時代以降の堆積であると考えられることから、1区出土遺物と同様に北方上流から流されてきたものと思われる。

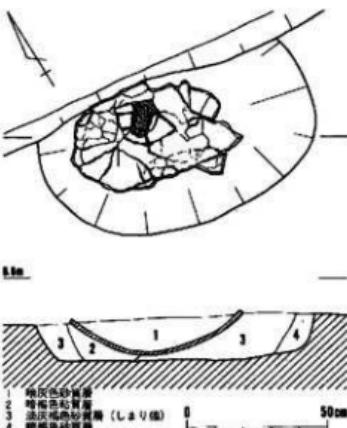


図7 遺構実測図(4区弥生時代)

2. 奈良・平安・鎌倉時代

1区北側及び2区東側は擾乱。削平のためか、遺構・遺物共に検出できず、調査区南側の比較的擾乱がされていない箇所から、主に黒褐色シルト層において検出された（図8）。

調査区内においてほぼ真北の方向を向いている建物の平面プランの一部が1棟のみ確認できた。柱穴No.1～No.14の14個によって構成される掘立柱建物であるが、南側については調査区域外となるため桁行の規模は不明である（図9）。

柱穴は黒褐色シルト層を隅丸方形に掘り込んでおり、その規模は一辺100cmから55cmの平均75cmで、規模、方向共にやや不均一、深さは54cmから26cmを測る。埋土は掘削した黒褐色シルトをそのまま入れ戻したのではなく、締まりのよい淡灰褐色砂質土を入れていた。柱根が柱穴No.4とNo.13に残存しており、柱穴のはば中央、底に接して据えられていた（図10）。柱材は上部が立ち腐りしているが、直径約20cmの心持ち材であることが確認できた。柱穴No.4は柱穴No.5を切って掘り込まれているが、検出面、埋土の状況から両者の間には大きな時間幅がないと思われ、また、他に対応する柱穴が無いことから、恐らくは建物の建設時の修正によるものと考える。柱穴No.7は柱根が明確でなく、あるいは独立した柱穴ではないかもしれないが、柱穴掘り方は明らかに柱穴No.8方向から延びていた。前述の柱穴No.4、5のような状況を示していたのかも知れないが、土層の観察で不明瞭ながらも柱根を認め、独立した二つの柱穴として図示した。

柱穴からは須恵器・土師器が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはなかった。また、柱穴No.11からは鉄錐先（図19—101）が破片で出土した。

他にも1—5区、2—3・4区でも隅丸方形の柱穴が検出されたが、明確でなく、柱根も認められない上に擾乱により関連する柱穴が不明であるため、その性格は判然としない。

上記の掘立柱建物以外に径30cm程のビットが約40件検出された。全体にみて掘立柱建物の北辺をコの字形に囲むようである。埋土より灰白色シルト、黒褐色シルト、灰褐色疊まじりシルトの3種に分類できるが、検出面が同じで、ビット内から遺物がほとんど出土しておらず、かつ、後世の擾乱のため、ビット個々についての時期、遺構の性格は不明である（図8）。ただし、掘立柱建物を切っているビットNo.15が存在し、また掘立柱建物内にもビットが存在するため、これらビット群のうちいくつかは後出するようである。その中には、内部に石が置かれているビットNo.16、17、18や、骨片が出土したビットNo.19、遺物（図13—25）が出土したビットNo.20がある。

遺物は主に2—4・5区から出土した。黒褐色シルト層とその上層に部分的に認められた薄い疊層からの出土であるが、この2—4・5区は調査区内で、最も擾乱が少なく、その結果としてこの地区からの出土が多かったようである。土器は完形に近いもの（図13—15、図15—56・58）が古相（奈良時代後半から平安時代初め）を示し、2—4区の掘立柱建物北東側から

図8 漢字平面図



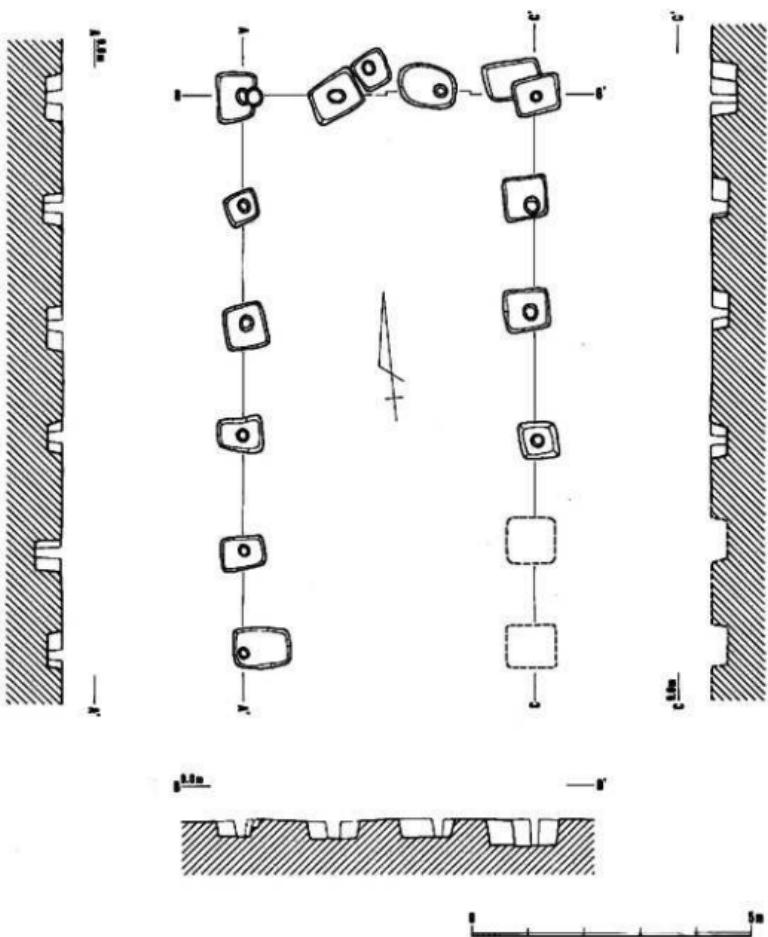


図9 造構実測図（据立柱建物）

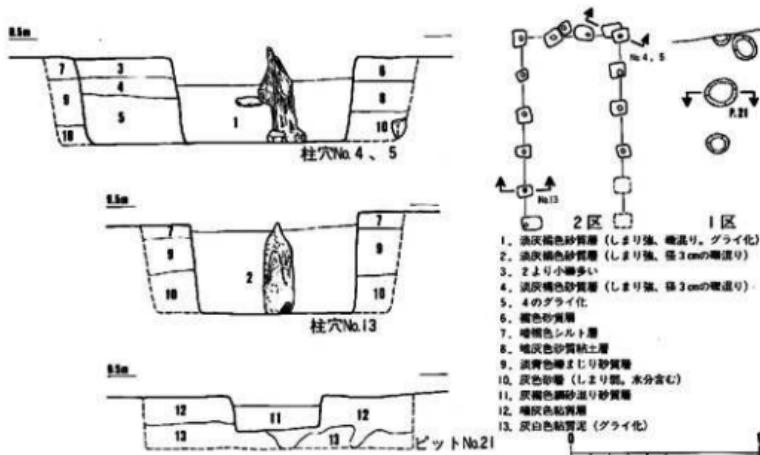


図10 柱穴・ピット断面図

多く出土していることから、この建物に伴うものと思われる。他に2・3区で全て破片ではあるが2つの群で10cm程の礫と共にまとまって出土している。この2群は全て古相の遺物から成っている。この他は全て残片として散在、流された状況で出土した。新相（平安時代後半から鎌倉時代）を示す遺物は特に密集するようでもなく、一部古相の遺物と混ざりながら散在して出土した。遺構の切り合い関係、及びピット内出土の遺物から、遺物の新古2相は古相が獨立柱建物に、新相が少なくとも小ピット群の一部に対応するものと考えられる。

第4章 出土遺物

出土遺物は、造構、層位別に分けられるものではなく包含層から一括して出土しているものが多いため、土器、石器、鉄器、その他と大きく分け、土器についてはその質から1.弥生土器、2.須恵器、3.土師器、4.陶磁器、5.その他に分けて記述する。

第1節 土 器

1. 弥生土器 (図11、12)

(1)が造構に伴って4区から、(11)が2—3区包含層から出土した他は、全て1—4区砂砾層から出土している。器種

は壺、甕がある。

太頭の広口壺(1)は復元
口径41.6cm、頸部径37.2
cm、胴部最大径56.2cmを
測る。大きく球形に膨ら
んだ肩部から、緩やかに
外脇、肥厚し、口縁部を
平らにやや外方に向けて
作り出している。残存部
が少ないので、表面が荒れ
ているため、詳細な観察
は出来ないが、外面がヘ
ラ磨き、内面が指による
ナデの調整がなされている
のが確認できる。外面
の磨きの方向は、胴部最
大径を測る部分から上が
右下から左上に向かって、
それより下が左下から右
上に向かっている。ヘラ
磨きの沈線が、口縁端部

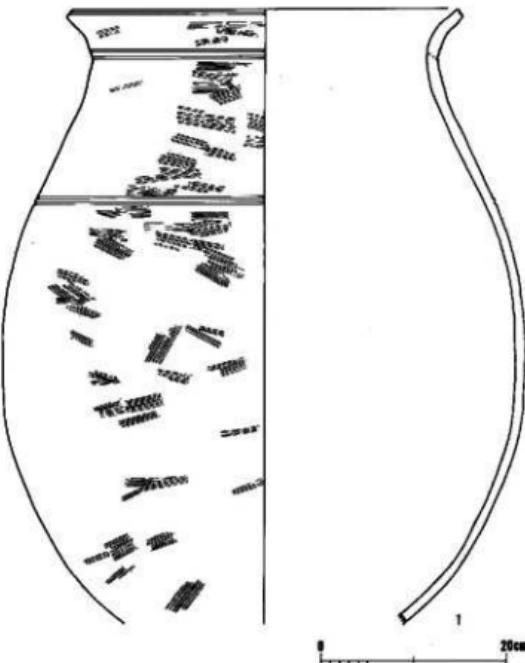


図11 出土遺物実測図 (弥生土器(1))

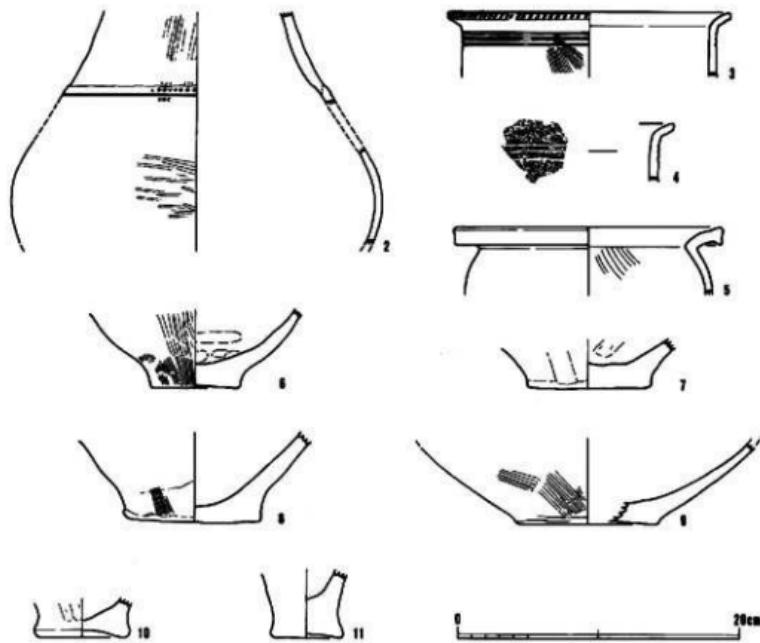


図12 出土遺物実測図（弥生土器(2)）

の平坦面に1条、頸部に2条、胴部上半の1/3位に2条巡らされている。ただし、胴部上半1/3位の沈線は、引かれた後、磨きによって消えかかっており、結果として非常に浅く、細くなっている。

壺形土器(2)は、削り出し突帯をもち、最大径を胴部下半に置き、25.5cmを測る。外面はヘラ磨きにより調整され、突帯より下は左上から右下へほぼ水平に、突帯より上はほぼ縱方向に磨かれている。内面は指押さえとナデの痕跡が確認できる。突帯は頸部と胴部の境、内側へ積み上げられた粘土の接合部を押さえ付けるようにして約2~3mmの高さに削り出されており、内面は接合のため内側へ張り出している。突帯の文様は沈線が1条、6mmの間隔で巡らされているのが確認できるが、全部で何条になり、突帯の幅が何cmになるのかは不明である。沈線の上下には径1.5mmの竹管文が4mmの間隔で施されている。底部は不明であるが、胎土・色調及び焼成から(6)の底部と同一個体である可能性が認められる。

變形土器は2種出土している。(3、4)は上外方に屈曲する口縁部をもち、端部に幅2mmで5mm

の間隔の刻目を有する。(3)の体部には、ほぼ縦方向のハケ目による調整痕が確認できる。ヘラ播沈線が3条巡る。(5)は大きく「く」の字形に外方へ屈曲し、端部に比較的大きな平坦面をもつ口縁部を有し、頸部から胸部へと緩やかに広がっている。内面には斜め方向でやや屈曲したハケ目の痕跡が確認できるが、外面の調整は磨滅のため不明である。

(6~11)は底部の破片である。ただし、(11)については蓋となる可能性もある。底を高く作り出したもの(6~8、10、11)と、ほとんど作り出さないもの(9)がある。外面の調整はヘラ磨きを行ったもの(6、9)、底部付近外面にハケの痕跡を残したもの(8)、ナデ状の痕跡を残すもの(10)があり、内面の調整は刺離、磨滅等のため明確でない。

2. 須恵器 (図13、14)

杯蓋、杯身、椀、壺、甕、播鉢等が出土している。ほとんどが1区、2区の南側から出土している。

杯蓋は径16.6cmの大形と11.2cmの小形がある。(15)の1点を除いていずれも破片で出土しており、全体の形状は不明である。つまりはやや偏平化した感があるがしっかりとしており、丁寧にナデにより接合されている。体部は小形は(14~17)のようにほぼ水平に延び、大形は緩やかに段をもって下がる。口縁部付近の形態は、小形にみられるような折り返したもの(15、17)や大形にみられる鍵状に屈曲したもの(12)、大形、小形の両方に認められるほとんど屈曲しないもの、(14、16)がある。

杯身は古墳時代に属するものから、高台、平高台や高台のないものまで、幅広く出土している。(18)は短く内傾しているが立ち上がりを有し、底部がヘラ切り未調整であるなど雑な感がある。(19~23)は底部に貼り付けの高台を有するものである。底部から体部にかけてしか出土しておらず全体的なプロポーションは不明であるが、高台は方形状を呈し、底部と体部の境の屈曲部すぐのところに貼り付けられている。(19)は底部、高台等全体的にみて雑に作られており、それ以外は高台をナデにより貼り付けるなど丁寧に作られている。しかし、(21)は高台が他と比較してやや小さく、貼り付けも痕跡を残すなど若干雑である。(24)は、小形の杯で浅く、大きく外方へ開いている。底部はヘラにより切り離されている。

椀は5点出土しているが、(27)以外は小片である。(27~29)は平高台である。(27)は体部がやや膨らみながらも上外方へ延び、端部でさらに外反している。内面にナデによる接線が残っている。ヘラにより切り離されている。(29)は糸切り痕を残す小椀の底部である。

壺は頸部、胴部、底部、把手が破片で出土している。頸部片(30、31)は長頸壺の一部と思われ、いずれも体部に貼り付けられており、ほぼ上方へ細く長く延びるものと、外方へ開くものがある。前者には内面にしばりの痕跡が認められる。胴部片は把手をもつもの(32)が出土している。底部片は貼り付けによる高台をもつもの(34、35)と、もたないもの(36)が出土している。

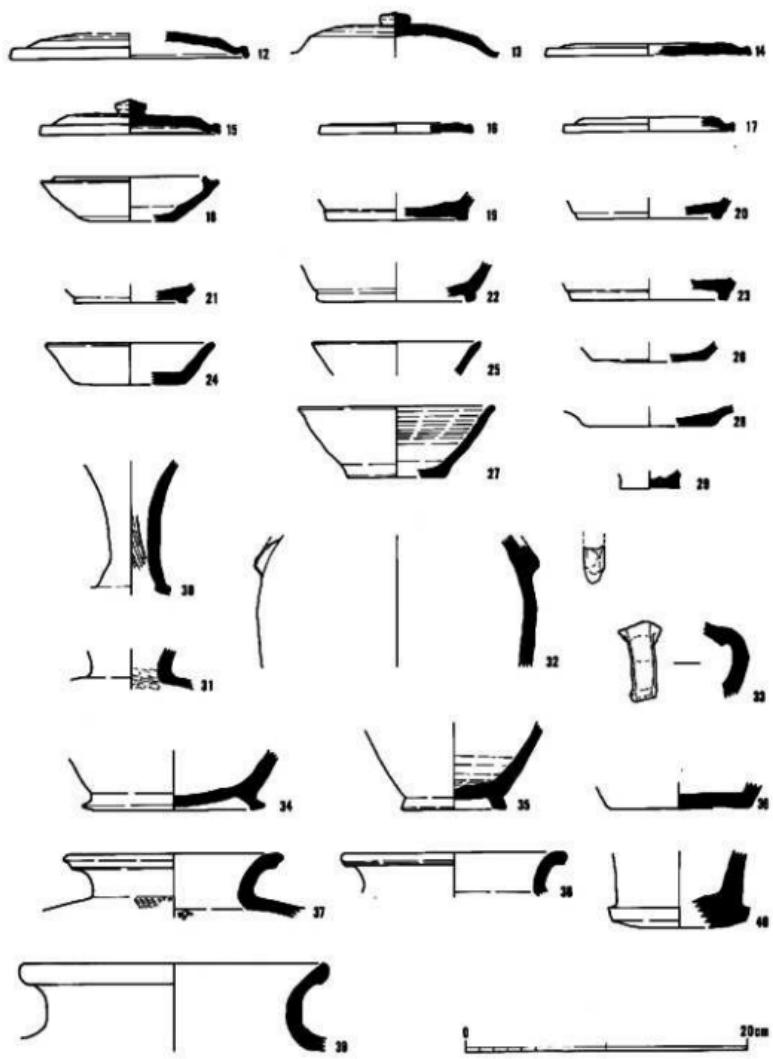


図13 出土遺物実測図（須恵器(1)）

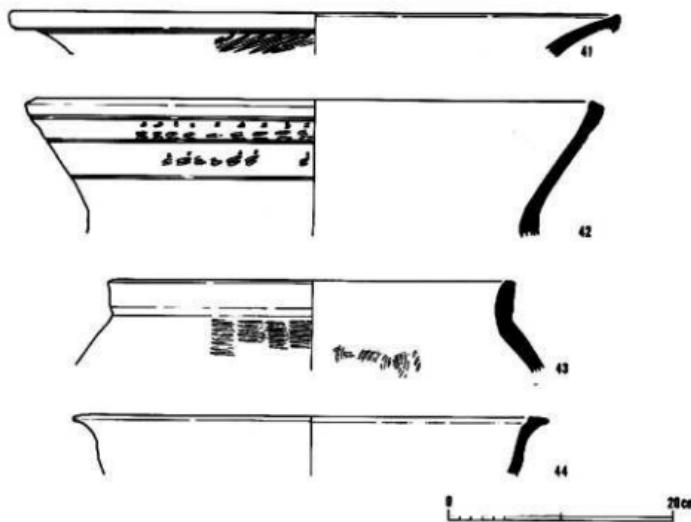


図14 出土遺物実測図（須恵器(2)）

前者のうち(34)は底部径が大きく、高台は外方へ大きく張り出しているのに対し、(35)は底部径が小さく、高台は短く、下面が水平で地面に密着するようである。高台のない底部(36)は雑な作りで、ヘラにより切り離されている。

甕は、大形・小形の2種類が出土した。小形のものは直径11cmから15cm程度で、口縁部の形態が、端部外面にナデによる凹みのあるもの(37、38)、体部から一度上方へ延びた後外脣し端部を外側へ折り返し、上方へ延ばしたもの(39)がある。大形のものは口径59cm以上で、口縁部が外側へ開くもの(41)、大きく上方へ延びるもの(42)や、短く直口するもの(43)がある。菱彫が認められるものがあり、(41)はヘラ描き文、(42)は沈線間に列点文が施されている。(43)は外面に粗い平行叩き痕、内面に同心円の細かい当て具の痕跡が認められる。

擂鉢(40)は古墳時代に認められる形態のもので、底部のみ残存していた。丁寧な作りで、底部外側に面取りがなされているが、穿孔は認められない。

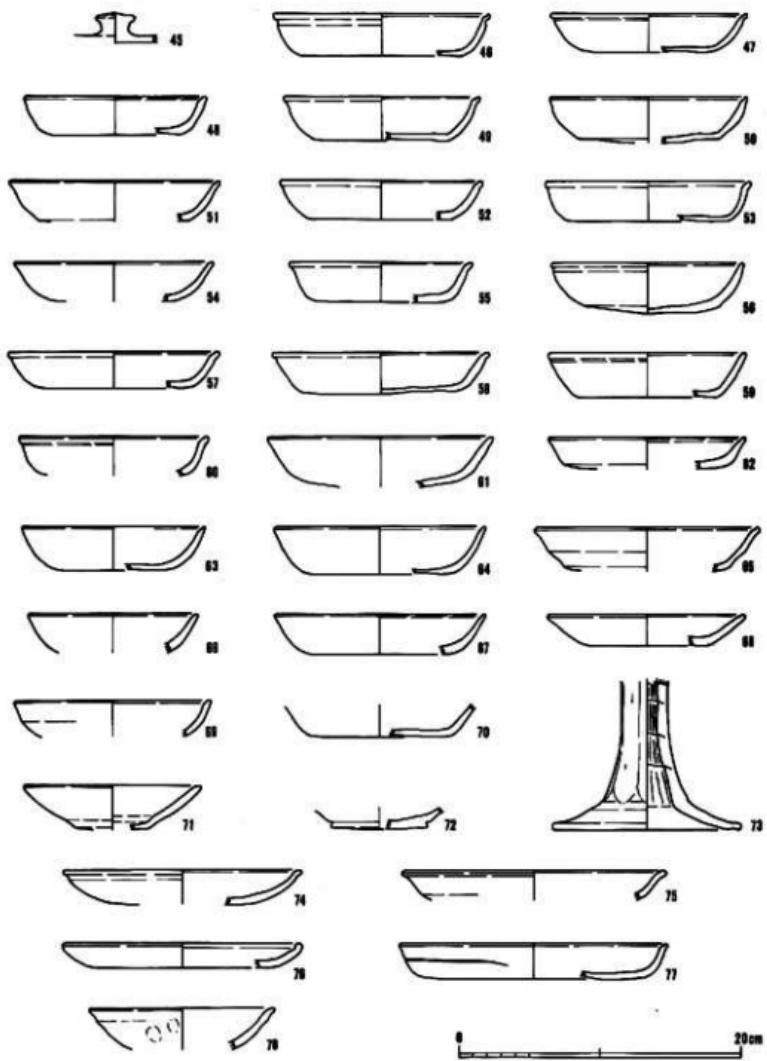


図15 出土遺物実測図（土器類(1)）

3. 土師器（図15、16）

杯蓋、杯身、皿、碗、甕、高杯、壺、羽釜、把手片、片口鉢が出土している。今回の調査で出土した遺物の中では土師器が最も多く出土した。その中でも杯が最も多く出土し、図示し得たものだけでも28点を数え、次いで、皿、甕が若干量出土している。須恵器と同様ほとんどが1区、2区の南側から出土している。

杯身は形態、技法、色調、胎土等から類似した一群(45~70)と、その他の一群(71~72)に大別される。前者は口径平均14cm、底部径平均10cm、器高平均2.8cmを測る。その内、(68)のように底部が小さく、上外方へ開くものもある。前者の基本的な作りは、底部を指押さえののちナデ、口縁部は横ナデにより調整している。ナデの強いものは(65)のように1~2本の稜を残している。暗文は、器表面が荒れているためか確認出来ない。これらの杯は、口縁端部の形態により4種類に分類できる。

I類……………内面に沈線を巡らし、大きく外方へ彎曲したもの (46、47)。

II類……………同じく内面に沈線を巡らし、外面は部体の横ナデによって相対的に外方へ膨らんでいるもの (48~58)。

III類……………内・外面共に沈線を巡らし、やや外方へ膨らむもの (59、60)。

IV類……………内面にのみ沈線を巡らし、外面はそのまま真っ直ぐに直線的に上外方へ延びるもの (61~68)。

いずれの杯も色調は橙系を呈し、胎土は精良である。出土点数はII類が最も多く、次いでIV類、I類、III類の順に多い。

また、これらの杯身と異なる一群に(71、72)がある。平高台を有し、(71)はヘラにより、(72)は糸により切り離されている。

高杯は脚部が1点のみ出土している(73)。細く長く延びた脚部は7面に面取りされており、ラッパ状に大きく開き端部に至る。端部は丸く仕上げられているが、内面の太い沈線により内側へ折り込むような意図が見受けられる。

皿は、4点のみ図示し得た(74~77)。口径平均17.5cm、底部径平均11cm、器高平均2.2cmを測る。全体の形態は底部から口縁部にかけてなめらかに延びるものと、大きく屈曲するものの2種類が存在する。口縁部の形態による杯の分類に従えば、I類(74、75)、IV類(76、77)が出土しているが、(75、76)については、口縁端部が内面に巻き込まれているという違いがある。色調は(76)が赤色を呈し、形態と共に異色を放っているが、他は橙色を呈している。

碗は1点のみ図示し得た(78)。口縁部はナデによりやや外方へ延び、体部は丸く膨らんでいる。体部に指頭圧痕が残る。

甕は計3点出土しているが、いずれも口縁部のみの出土で全体の形状は不明である。滑らかに外反し口縁端部で上方へつまみ上げる大形のもの(79)、小形で口縁端部をややつまみ上げる

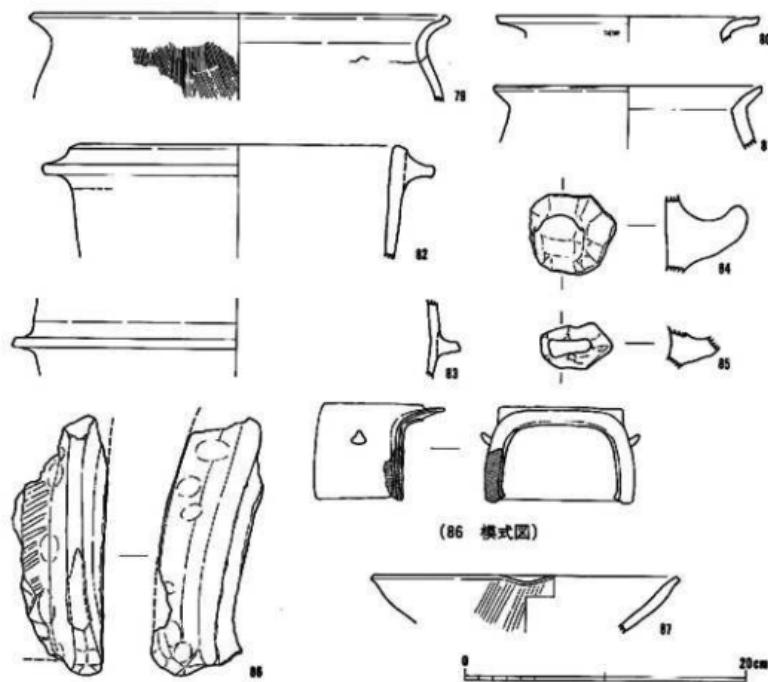


図16 出土遺物実測図（土師器(2)）

もの(80)、体部から口縁部にかけて「く」の字形に屈曲する小形のもの(81)がある。調整は外面がハケ目、内面はナデによるものが見られるが、(81)は磨滅のため確認できない。

羽釜は器壁が厚く粗製であるもの(82)と、器壁が薄く精緻なもの(83)が出土した。前者は鋲を口縁部直下に貼り付けているのに対し、後者は体部中程に貼り付けているようである。

把手が2点出土しているが、いずれも破片で何に伴うものかは不明である。(84)は把手部の全てが残存しているが、その形態は、幅が広く、外方へ大きく張り出し、上方へ延ばしているもので、ナデにより整形されている。

竈は前部下の破片が出土した(86)。他の破片は全く出土しなかった。貼り付けにより鋲状に大きく突出し、指頭圧痕が明瞭に残る。体部外面には平行叩き痕が認められる。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。色調は淡橙色で、焼成はやや軟質である。

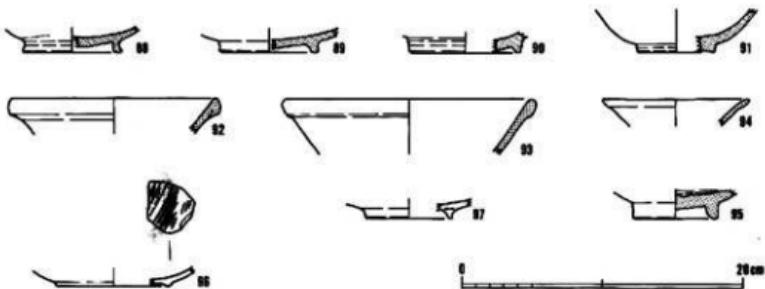


図17 出土遺物実測図（陶磁器、その他）

片口鉢（87）は底が浅く、外方へ大きく開く体部で、口縁部の一部を下方へ凹ますことにより片口部を作り出している。体部外面には粗いハケによる調整の痕跡が認められる。

4. 陶磁器（図17）

陶器は(88~91)までの綠釉陶器が出土した。椀もしくは杯の底部と考えられる破片(88・89)、杯もしくは皿の底部と考えられる破片(90)、碗(91)の破片がある。いずれも、成形は粘土紐巻き上げ成形の後、ロクロナデ、ロクロ削りが加えられる。高台は貼り付けの高台と平、あるいは蛇の目高台の2種が存在する。前者には、高台が若干外方へ踏んぱり、端部を少し水平方向につまみ出すもの(88)と、高台の断面形状は四角形を呈し、高台部外面はナデによる再調整が加えられているもの(89)がある。削り出しの高台をもつ(91)は比較的小さく、釉調は他の綠釉とは異なりガラス質である。また、(90)は高台疊付の釉が掻取られている。あるいは中世の灰釉陶器の可能性も考えられる。(91)は底部外面にロクロ削り痕を明瞭に残す。

磁器は白磁碗、皿が出土した。(92・93)は碗、(94)は皿、(95)は碗底部である。

碗は口縁部が玉縁状に肥厚するもので(92)は乳白色に発色し、(93)は青味を帯びた灰白色に発色する。いずれも、器面には気泡及び貫入が認められる。

皿(94)は口縁部外面に低い段を有し、内外面共施釉され、青味を帯びた灰白色に発色する。碗の底部(95)は高台の幅が狭く比較的高い。内面底部には沈線が一条認められる。

5. その他（図17）

黒色土器(96)は高さの低い断面三角形の高台を貼り付けている。内面底部には同心円状に巡らされたやや粗雑な暗文が確認できる。

瓦器(97)は比較的高い台形状の高台を貼り付けている。暗文は磨滅のため確認できなかった。

第2節 石 器 (図18)

本遺跡から出土した石器は3点である。石材はすべて安山岩(サマカイト)が用いられている。槍状石器(98)は2—4区暗褐色シルト層から出土し、現存最大長6.3cm、最大幅3.7cm、最大厚1.0cmを測る。全体の約半分を欠損しているが、残存する部分は形態からすると槍状石器の先端部であると考えられる。一方、表裏両面とも背の稜部分には磨滅を認めることができる。この磨滅は両側縁には見られない。したがって、背の稜部分の磨滅痕跡は水磨によるものではなく、先端部に認められる微細な剝離痕とともに、使用によるものと思われる。

また、同じく2—4区の黒褐色シルト層からは、削器(99)、調整痕のある剝片(100)の2点が出土した。

削器は現存で最大長4.9cm、最大幅2.8cm、最大厚0.6cmとなるが、長幅共に欠損している。剝片素材の石核を石器の素材に転用し、その側縁部には表裏両面からの調整によって刃部が作り出されている。

調整のある剝片の大きさは、現存最大長3.2cm、最大幅2.0cm、最大厚0.8cmを測る。剝片の上半部を欠いているが、縦長の剝片の末端部分に細かな剝離が施されているようである。

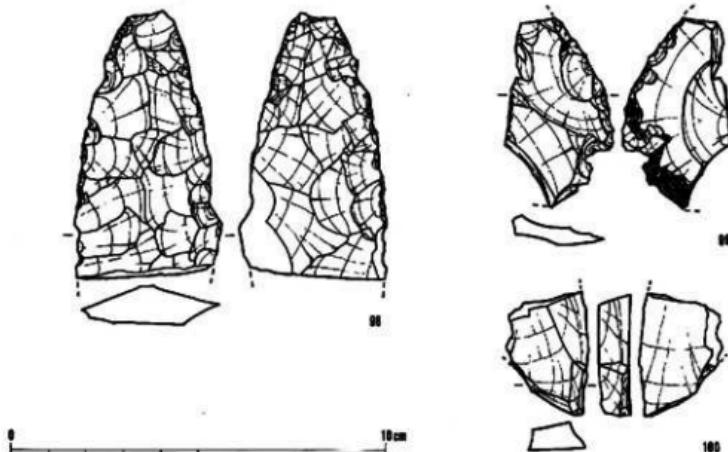


図18 出土遺物実測図(石器)

第3節 鉄器 (図19)

2点出土している。(101)は2区の掘立柱建物を構成する柱穴No.11から出土した。緩やかに彎曲しながら細くなっている、その形状から鎌の刃先であると思われる。背側より刃部の方が若干厚みがある。現存長5.5cm、幅3.0cm、厚さ0.3cmを測る。(102)は1—5区から土器等と共に包含層から出土した。端部を若干折り返した断面方形の棒状のもので、釘の一部と考えられる。現存長4.4cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。鋭角に折り返しており、先端は若干薄くなっている。

第4節 その他 (図19・20)

土鍤、砥石、柱が出土している。

土鍤は2—4区から2点、2—5区から1点、包含層より出土した。ほぼ同形態の管状の土鍤であるが、(103)、(104)が太く、前者は中央部がやや広がるのに対し、後者は、小形の(105)と同様にはば棒状を呈しているといった違いがある。

砥石は全体的にみてやや歪んだ、いびつな形である。長さ10.8cm、幅1.6cm、厚さ1.4cmを測り、細長い直方体を呈する。上部中央が研ぎベリによって凹んでおり、縦方向に使用痕と思われる傷が認められる。6面とも整形時の調整痕と思われる跡痕が、端に近いところでは斜め方向に、中央部では縦方向に残されている。

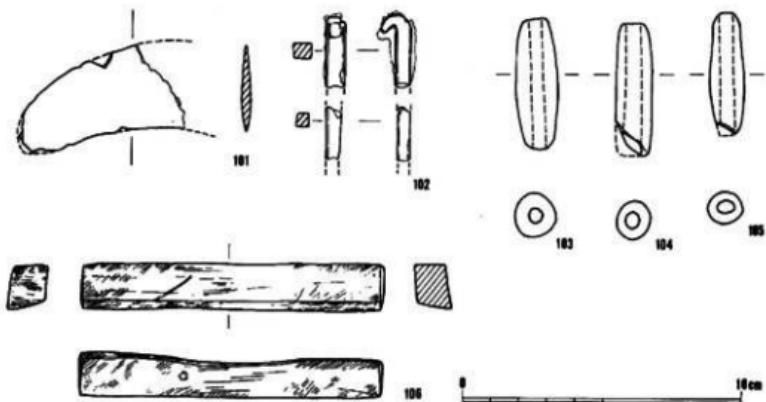


図19 出土遺物実測図 (鉄器、その他)

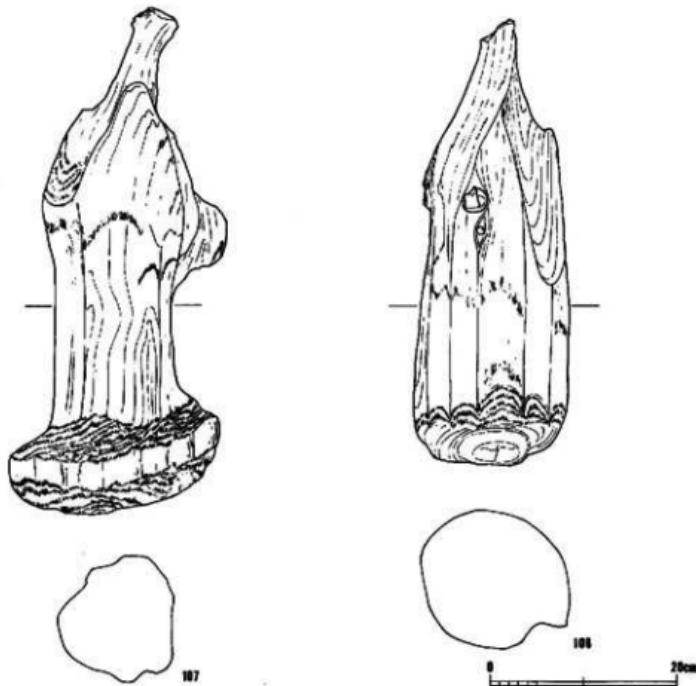


図20 出土遺物実測図（柱）

木器は柱材が出土しており、いびつな(107)と均整の取れた(108)の2点が出土している。(107)は柱穴No.4に遺存した。底部最大径22cmを測る心持ち材であるが、一部が縦方向に裂けているため、若干心が偏在している。下から10~20cm程上は深さ約5cm程削られた様に抉りこまれており、底部が大きく張り出している。上部は立ち腐りのため鍤状に細くなっている。(108)は柱穴No.13に遺存した。底部最大径15cmを測る。底部は節の所で切断されており、底部周囲には全体に面取りが行われている。上半部は立ち腐りのため次第に細くなっているが、縦方向へ折った様な隈みがある。

それぞれの樹種は附編に詳しいが、そこで言う資料番号1、2は、それぞれ(107)、(108)である。

第5章 遺構・遺物の検討

今回の調査で遺構に伴い出土した遺物は、大きく分けて、①弥生時代前期、②奈良時代後半から平安時代初頭、③平安時代中頃から鎌倉時代初頭、の3時期に区分できる。個々の遺物がそれぞれどの遺構に対応するかは、出土状況が良好でないため、弥生時代前期の遺構の他はほとんど明らかにすることはできなかった。ただ、遺構の切り合い関係など第3章に述べたような理由により、隅丸方形の掘り方をもつ掘立柱建物は奈良時代後半から平安時代初頭に、小ピット群は、その幾つかが平安時代中頃から鎌倉時代初頭にあたるものと考えた。本章では以上の様な認識の上に立ち、各時代それぞれの遺構・遺物について検討を加えることとする。

第1節 弥生時代

微高地の東端部において、据えられた状態で、大形の太頭広口壺形土器が出土した（図21）。状況より壺棺である可能性が指摘できるが、出土状態が良好でないため明確でない点が多い。そこで、ここでは遺物それ自体がもつ関係を中心に話を進め、尼崎平野のなかでの当遺跡の位置づけを考えてみたい。

まず、はじめにあたって特筆すべき遺物の特徴を列記する。

- ①口縁端部・頸部・胴部にそれぞれ1条・2条・2条のヘラ描き沈線を巡らす。
- ②胴部のヘラ描き沈線は磨きにより消えかかっている。
- ③頸部から口縁部にかけて直線的に延びることなく緩やかに外側する。
- ④口縁部に肥厚させるような粘土の接合は見られない。

これらの諸特徴はいずれも弥生時代前期（第Ⅰ様式）に見られるものであるが、まず、この遺物の編年的位置づけを周辺の遺跡を参考にしつつ、さらに詳細に検討する。

本遺跡を尼崎平野の弥生時代の中で位置

づける際に最も重要な遺跡となるのが、上ノ島遺跡である。上ノ島遺跡は同じ前期に営まれ、同じ旧武庫川の右岸であったと考えられ、東武庫遺跡からは直線距離にして1.3kmという比較的の近距離に位置する。上ノ島遺跡からは第Ⅰ様式古段階から新段階にわたる多量の遺物が出土しているが、古段階に相当する土器はわずかしかなく、そ

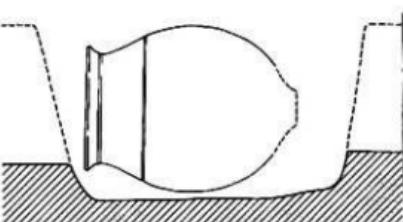


図21 4区 弥生土器出土状況推定復元図

の中心となるのは中段階から新段階にかけて、すなわち、削り出し突帯から貼り付け突帯が盛行する時期であり、第Ⅰ様式以降の直続する遺物の出土はみられない。上ノ島遺跡からも、この種の太頸広口壺形土器が出土している。頸部の文様との組合せは、削り出し突帯、2~3条の沈線、無文があり、段、及び貼り付け突帯は見られない。その中で、口縁部に粘土を貼り付けることにより屈曲、肥厚させ、その合わせ目となる端部に沈線を巡らせるものが確認された¹¹。本来の口縁端部の沈線の意味が、この粘土の接合に関わるものであるとすれば、東武庫遺跡出土の太頸広口壺形土器に見られる④の特徴は、本来の意味を失い、沈線だけが残るという形態化したものであるといえ、型式学的にみて後出的な要素であるといえる。この壺形土器には削り出し突帯が巡らされており、東武庫遺跡出土の土器は削り出し突帯の出現以降であるといえる。

また、田能遺跡からもこの種の土器が第4N調査区第8溝の第1層から出土している。この土器には頸部に段が認められるが、同一層から出土した他の土器には削り出し突帯第Ⅰ種及び第Ⅱ種（少条）が用いられており、全体として第Ⅰ様式中段階に比定されており、上記の時期とに矛盾はない。

以上のように、形態化した沈線を口縁端部に巡らすこの種の土器は、少なくとも当地域周辺では第Ⅰ様式中段階以降に出現しているといえる。また、本遺跡出土土器は少条であり、区分文様としての意識があるにも関わらず、区分する意識が薄れ、沈線を引くことの本来的な意味が形態化し、②の特徴に見られるような状況になっていることから、中段階でも後出的な要素の見られる段階であるといえる。しかし、それが削り出し、貼り付け突帯及び多条沈線として装飾化されていないところに、この土器が新段階まで下がらないことを表している。

次に、1区砂礫層から出土した弥生土器片について触れる。特徴としては、以下の点が挙げられる。

①削り出し突帯により装飾されている。

②削り出し突帯には沈線と竹管文による装飾が施されている。

削り出し突帯は第Ⅰ様式中段階を中心とする手法であるが、その中でも加飾されているという点で、後出的な要素をもっている。前出の上ノ島遺跡を見ても、竹管文は多条化した沈線と共に施されており、また、同じく田能遺跡を見ても、中段階の土器群の中に竹管文が見られる。

以上から、4区出土の太頸広口壺形土器とはほぼ同時期のものとすることができる、また、北方から流入してきた砂礫層から出土したことから、4区にみられる遺構と同一の遺跡を構成した遺物である可能性が高い。他の壺形土器についても3条という少条の段階であり、同じく同一遺跡の遺物であると考える。そこで、これらの遺物を東武庫遺跡（正確にはその北方も含む）の弥生時代を構成した遺物とし、便宜的に比較する材料としたい。

以上より、出土遺物が少ないため周辺の遺跡に頼りながらではあるが、その編年的位置づけ

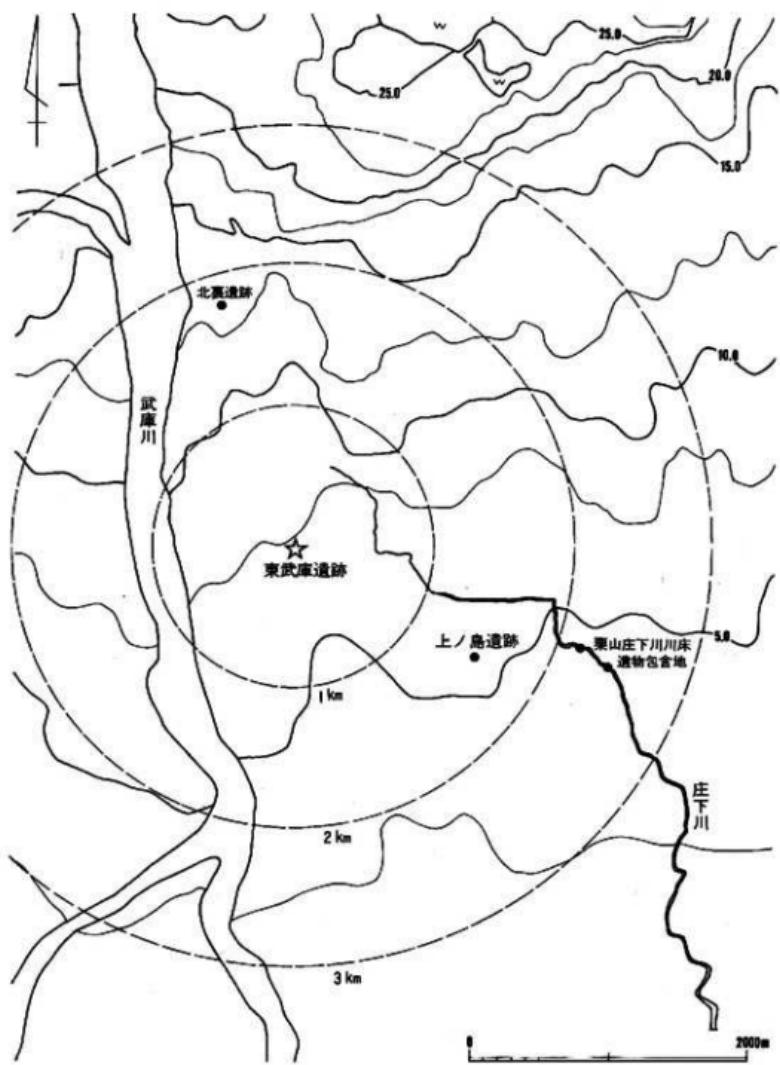


図22 遺跡分布図（弥生時代前期）

を試みた。その結果、1区砂礫層出土の弥生上器と4区出土の弥生土器が、出土状況及び製作時期から、同一の遺跡の遺物であると考えられ、その時期として、弥生時代第I様式中段階後半であると考えた。これらを踏まえた上で、尼崎平野における本遺跡の位置づけについて以下に述べる。

前述のように本遺跡と密接に関連するのは上ノ島遺跡である。一般に上ノ島遺跡は畿内第I様式古段階に遡る遺跡と考えられている。しかし、当該期の遺物は少なく、中心となるのは中段階から新段階にかけてである。このような現象は、石野博信氏が大和地域の分析を通じて「新の段階に至って縄文人が稻作農耕を主体的に採用した結果、弥生時代遺跡の爆発的増加をもたらした」と結論づけているのと、現象面ではよく合致している。また、その要因として、畿内第I様式中段階（大洞A・A'式併行）に、縄文人の積極的な交流があったと想定している。西摂地域においても微量ではあるが猪名川川床、瀬川川床から滋賀里IIIb・IV式が出土し、縄文人の沖積地進出が推測され、弥生上器を出土した上ノ島、田能遺跡では船橋式が出土し、このころ縄文人と弥生人の接触があったことが窺える。このような状況の中で東武庫遺跡を考えた場合、畿内第I様式中段階頃にある弥生時代遺跡の増加・発展期にあたると考えられ、同期に成立した田能・勝部遺跡と同様の現象であると言える。ただ、森岡秀人氏が憶説としながらも指摘しているように、交渉の主体が縄文人の側にあり、口酒井穴森遺跡の住民が弥生人と積極的交流を進めてゆく中で「分離し」、その結果、田能・勝部遺跡が誕生したのであれば、東武庫遺跡は、①上ノ島遺跡と直線距離にして1.3kmで、同じ旧武庫川水系にあり、地理的に近い位置にある。②資料的制約があるとしても縄文土器が出土していない、の2点から、上ノ島遺跡からの分村であると捉え、田能・勝部遺跡とは、集落形成の契機において異なる評価を与えるべきかもしれない。そして分村の要因として、定着し、発展した上ノ島遺跡の飽和と、武庫川上流域へと可耕地を広げることができるような技術・労働力の成熟が挙げられるのではないかだろうか。

第2節 奈良時代後半から平安時代初頭

遺物はほとんどが経片で全体の形状は不明であり、かつ一部は新相の上器と共に出土した。当該期の主な遺物として、須恵器は杯B類（12~17、19~23）が出土、土師器は杯A類（46~70）、皿A類（74~77）が出土した。

須恵器杯B類のうち蓋は、径が大きく鍵状に屈曲するものや、径が小さく鍵状及びほとんど屈曲しないもの等がある。また身は口縁部が出土しておらず、不明な点が多いが、底部から全体へと屈曲する付近には高台が貼り付けられている。

土師器杯A類は、今回の調査で最も多く出土している。径高指数は27から16まで存在するが、

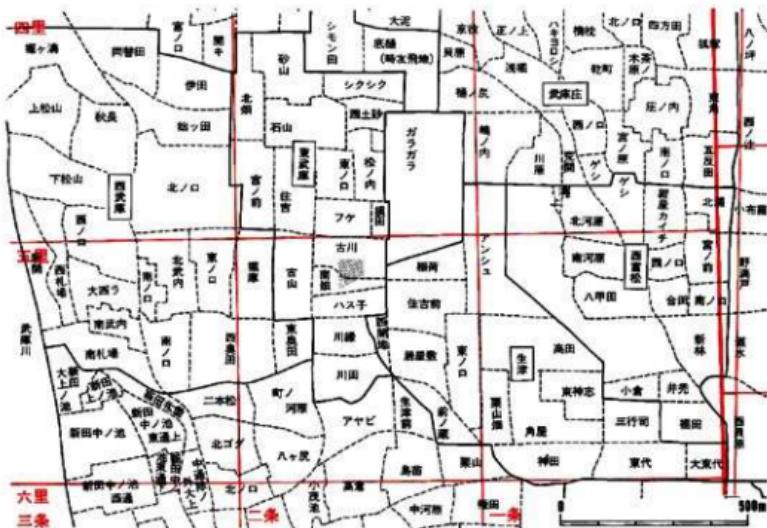


図23 字図及び里復元図

ほぼ20前後である。暗文は認められず、口縁端部内面に沈線を巡らすのを常としている。第4章では口縁端部の形態によりIからIVの4種に分類したが、径高指数はI類とII類がほぼ同じ、III類がやや高く、IV類が最も低い。また外傾指数については、I類が高く、II類、III類がほぼ同じでIV類が最も低い。このことは、I類からIV類が単に形態の違いではなく、径高指数、外傾指数に反映しているような時期の違いである可能性が高いことを示している。そして、II類とIII類、あるいはII類とIII類とIV類がまとまって出土していることから、それほど長期にわたって製作、存続しているとは考えにくい。すなわち、ここではこの形態の変容は短期間で成し遂げられたものと考え、そこにこれら土師器の年代を決定する要素を認めるものである。平城宮における土師器の編年では、平城宮IVからVIIにかけて法量縮小の傾向が、平城宮VからVIIにかけて外傾指数が増大する傾向が指摘されている。その中でも平城宮VIほど外傾が著しくないことから、当遺跡出土遺物は平城宮VからVIに併行すると考える。



図24 方位関係図

このことは、口縁部内面の沈線が折り込みの形態化として捉えられることからもあてはまる。また、細く長くなった高杯（73）をみても言え、須恵器の示す形状からも大きく外れるものではないと思われる。

以上のように、出土土器が示す年代は平城宮VからVIに併行するもので、その年代は同じく平城宮の年代観をそのまま慣用し、780年から800年と考える。

次に、掘立柱建物であるが、出土遺物は砥石などを含むものの日常雑器が主であり、特別な施設とは考えにくい。ただし、出土遺物の中には転用硯が多くみられ、何らかの文字を使用していたことは疑いない。すなわち、単なる一般集落ではなく、それらをある程度総括する役務を担った建物ではなかったかと推測されるのである。

また、周辺地域には武庫郡の条里の存在が指摘されており、その復元に従うと、武庫東郡2条5里にあたる（図23）。建物の方向と条里の関係は、武庫郡の条里が西偏しているのに対して、建物はほぼ南北の方向を向いている。この建物の方向はむしろ1km西に、武庫郡の条里に切られるようにして存在する川辺郡の条里に近い（図24）。この状況に対する理解の仕方として、①現在復元されている武庫郡の条里の方向に問題がある ②建物が建てられた時期には川辺郡の条里が及んでおり、武庫郡の条里はその後施行された ③条里の方向とは関係なく建物が建てられた、の3点が考えられる。このいずれであるかは、同時期の周辺の遺跡の調査が進行した段階で改めて検討することとして、ここでは速断は控えておく。

第3節 平安時代中期から鎌倉時代前期

本遺跡から出土した遺物の内、平安時代中期から鎌倉時代前期に属するものは、量的にも極めて少量で、ほとんどが細片の形で出土しているため、全体の形状が不明なものが多い。また出土状況も、遺構に伴うものはほとんどなく、大部分が包含層から奈良時代後半から平安時代初頭の遺物と共に出土している。

全体的には、綠釉陶器など少なくとも10世紀後半から11世紀代に属するものと、白磁碗、皿類など、12世紀後半から13世紀前半代に属するものとに大別される。

前者の時期に属するものは、綠釉陶器の他、須恵器碗（26～28）、壺（32～35）、甕（37～40）などがある。

（27）の須恵器碗は、平高台を作り出し、高台部側面に再調整を加え、底部の切離し技法がへラ切りである等の特徴をもち、三田市相野窯で生産されたものと類似する。

後者に属するものには、白磁碗の他、土師器羽釜（82）、片口鉢（87）、碗（72、78）がある。白磁の碗、皿類は、いずれも太宰府出土のものに類例が認められる。（92、93）は横田、森田分類白磁碗IV類、（94）は白磁皿III類、（95）は白磁碗VII類に相当し、いずれも12世紀後半から13世紀前

半の時期が考えられる。

(72、78)の土師器碗は、いずれも小片で、全体の器形は不明であるが、その形態的特徴が東播系須恵器に類似しており、このことから12世紀後半から13世紀前半の時期が与えられる。

次に、これらの遺物と遺構との関係であるが、掘立柱建物を切る形でピットNo.15が存在すること、また、掘立柱建物内にピットが存在することから、掘立柱建物よりは後出で、少なくとも2時期以上にわたっていることが窺われる。

以上をまとめると、本遺跡では、掘立柱建物の存在していた時期以降も、小規模な建物群が少なくとも2時期以上にわたって存在し、遺物の年代観から考えると、その下限は、13世紀前半に及んでいる事が窺われる。

註 1) 尼崎市教育委員会 岡出務、福井英治の両氏の御好意により、同市立文化財収蔵庫において、実見する機会を与えて頂いた。記して感謝いたします。

参考文献一覧

- 第2章 岡本静心ほか 「尼崎市史」第1巻(1966.10)
渡辺久雄ほか 「尼崎市史」第3巻(1970.9)
渡辺久雄ほか 「尼崎市史」第11巻(1980.11)
角川日本地名大辞典編纂委員会 「角川地名大辞典 28 兵庫県」(1988.10)
森岡秀人 「武庫川の水流と洪水」『古代学研究』第94号(1980.11)
- 第5章 岡本静心ほか 「尼崎市史」第1巻(1966.10)
渡辺久雄ほか 「尼崎市史」第3巻(1970.9)
渡辺久雄ほか 「尼崎市史」第11巻(1980.11)
尼崎市教育委員会 「尼崎上ノ島遺跡」(1973.3)
尼崎市教育委員会 「田能遺跡発掘調査報告書」(1982.3)
佐原 真 「畿内地方」「弥生式土器集成II」(1968.9)
石野博信 「大和の弥生時代」「考古学論巧」櫻原考古学研究所紀要第2冊(1973.3)
森岡秀人 「绳文ムラと弥生ムラの出会い—畿内北部を中心として—」
「绳文から弥生へ」(1984.7)
伊丹市教育委員会、財団法人古代学協会
「伊丹市口酒井遺跡—第11次発掘調査報告書」(1988.3)
尼崎市教育委員会 「尼崎市栗山・庄下川遺跡、桂木遺跡」(1974.3)
奈良国立文化財研究所 「平城宮発掘調査報告VII」(1976.3)
横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4』(1978.3)

第6章 まとめ

今回の調査は、約1,600m²にわたる調査区を設定し、調査を実施した。その結果、調査区内は、全面にわたって擾乱を受けていたが、南側部分を中心に、遺構の存在が確認された。今回の調査結果をまとめる以下の様になる。

①調査地点は、旧住宅が建てられていた所で、建物の基礎、配管及び旧建物の取壊しの際の掘り込み等によって、調査区の全域にわたって擾乱を受けている。しかし、少なくとも、弥生時代前期、奈良時代後半から平安時代初頭、平安時代中頃から鎌倉時代前期の3時期にわたる遺構が検出されており、当該期に人間の営みがあった。

②弥生時代の遺構は調査区の最も北側に設置した4区で検出されており、臺を横位に埋置した臺館の可能性がある。しかし、遺構面直上まで削平を受けていること、北側の一部が擾乱を受けていること等から、確実な事は言えない状況である。遺物の検討から、この遺構の時期は畿内第I様式中段階に属するものと考えられる。

③奈良時代後半から平安時代初頭に属する遺構は、調査区南側に東西方向に設定した2区の西側部分を中心に検出されている。検出された遺構には、掘立柱建物跡、及びその周辺に散在するピット群がある。掘立柱建物は、方形の掘り方をもつ、東西3間、南北5間以上の比較的大きい建物である。

④平安時代中期から鎌倉時代前半の遺構は、調査区の西側に南北に設定した1区の南端部分及び2区の全域にわたって疎らにピット群が検出されている。しかし、擾乱のため建物を復元するには至らなかった。また、ピットには骨片が出土したものもあり、全てが柱穴として建物を構成するものでないと思われる。出土遺物の検討から、10世紀後半から11世紀代に属するもの、12世紀後半から13世紀前半に属するものの2時期に細分される。また、ピット内の埋土の違いから、ピット群は3種に分類できる。以上をまとめると、本遺跡では、掘立柱建物の廃絶以降も、少なくとも2時期以上にわたって、集落が存在し、その下限は13世紀前半にまで及んでいる。

⑤遺構に伴わなかった出土遺物には、上記のもの以外に、弥生時代中期の上器、古墳時代後期の須恵器などがある。

附編は公開していません

観察表

表2 弥生土器

番号	器種	出土地区 出土層位	法量	現在	形態の特徴	社法の特徴	色調	胎土	備考
国11-1	広口壺	4区	口径41.6cm 肩部最大径 55.2cm	1/3	圓底、張口、口部とも破 やかに費曲する。口縁端部 鋸歯、側面にそれぞれ1条 2条、2条の沈窓を這らす。	外表面下半は右上がり の、上半は左上がりのへ 2段階。内面はナデがほ められる。	外) 黄色 Hue10YR4/4 内) 灰白色 Hue10YR7/1	白色砂 地、石 英多く 含む	國版8 地底後穿孔
国12-2	壺	1-4区 暗褐色砂礫層	肩部最大径 25.5cm	頸部のみ	頸部は内側に、ほぼ直線的 に延びる。外面には比較的 より上方に凹された、直径 1.5mmの竹管文の模様があ る頸出突起が進る。	頸部内側に胎土を構み、 強度を作る。頸部外側は 傾向のへう窓を。側面 外側はやや左上がりの傾 向のへう窓を。	外) 灰白色 Hue5YR8/1 内) 灰白色 Hue5YR8/1	石英若 干含む	國版9-上 6と同一個 体?
国12-3	壺	1-4区 暗褐色砂礫層	口径19.9cm	瓶片	口縁部は緩やかに外反する。 底面に5mm間隔の刻み目を 有す。外側に幅1mmのへう 窓き沈窓が、3条進る。	外に右下から左上への ハケの痕跡。	外) にじい褐色 Hue7.5YR5/4 内) にじい褐色 Hue7.5YR5/4	純良	國版9-下
国12-4	壺	1-4区 暗褐色砂礫層		瓶片	口縁部は緩やかに外反する。 底面に5mm間隔の刻み目を 有す。外側に幅2mmのへう 窓き沈窓が、3条進る。		外) にじい褐色 Hue7.5YR5/4 内) にじい褐色 Hue7.5YR5/4	石英・ 白色砂 地	國版9-下
国12-5	壺	1-4区 暗褐色砂礫層	口径18.7cm	瓶片	丸く脇曲する頸部から「く」 字形に絞出し、ほぼ直線的 に延びる口縁部を有す。 底部はやや外方へつまみ上 げ。下方に突窓が進る。	内面に右下から左上への ハケの痕跡。	外) 灰白色 Hue7.5YR8/2 内) 灰白色 Hue7.5YR8/2	石英・ 白色砂 地含む	器表記ある
国12-6	(底部)	1-4区 暗褐色砂礫層	底径 6.2cm	3/4	やや高い底盤で、緩やかに 頸部を作る。	外表面部はハケ目の後ナ ゲ、頸部に傾向のへう窓 を。内面底部は指頭压 痕。	外) 灰白色 Hue5YR8/1 内) 黑色 Hue7.5YR7/1	石英若 干含む	國版10-上 2と同一個 体?
国12-7	(底部)	1-4区 暗褐色砂礫層	底径 8.6cm	1/2	底部から緩やかに頸部を作 る。	内・外表面ハケ?により 傾向に開拓。	外) 褐色 Hue2.5YR8/8 内) 黑色 Hue7.5YR1.7/1	石英・ 白色砂 地多い 径3mm	國版10-上
国12-8	(底部)	1-4区 暗褐色砂礫層	底径 9.6cm	3/4	底部が盛みのためか、外方 へ肥厚している。	外側にハケ目の痕跡。	外) 褐色 Hue2.5YR8/8 内) 灰白色 Hue7.5YR8/2	白色砂 地含む	國版10-上 器表記ある
国12-9	(底部)	1-4区 暗褐色砂礫層	底径 9.8cm	1/3	底部は若干斜がつくくらい で、頸部は外側へ大きく張 り出している。	外表面下から左上へのへ う窓。	外) 灰白色 Hue7.5YR8/2 内) 灰白色 Hue7.5YR8/2	赤・灰 白色砂 地含む	國版9-上
国12-10	(底部)	1-4区 暗褐色砂礫層	底径 5.9cm	2/3	底部は内面がやや凹む。外 面は底部からやや凹んでか ら頸部へ延びる。	外表面方向にハケ目?	外) 褐色 Hue2.5YR8/8 内) 褐色 Hue2.5YR8/8	径1mm の白・ 黒色砂 地含む	國版10-上
国12-11	(底部)	2-3区 黑褐色シルト 層上	底径 4.9cm	底部完存	底部は内面がやや凹む。底 部から頸部へ若干外側す る程度で、ほぼ上へ延び る。		外) にじい褐色 Hue7.5YR7/4 内) 黑褐色 Hue7.5YR8/3	径1mm の白 色砂	國版10-上 底の可能性 も

表3 須恵器

番号	器種	出土地区 出土層位	法量	残存	形態の特徴	技法の特徴	色調	出土	備考
13 13 12	杯蓋	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径16.4cm	1/5	口縁部は一段下がり、本平 に延びたもの。底部は下方へ傾斜する。端部は丸 く仕上げる。	底部圓板へ削り。その 他の削板ナデ。	外) 灰白色 HueN8/ 内) 灰白色 HueN8/	精良	図版12-上
13 13 13	杯蓋	2-3区 黒褐色シルト 層上		1/5	つまみはやや厚みがあり、 中心がやや盛り上がる。体 部から口縁部にかけて一段 下がる。	底部圓板へ削り。その 他の削板ナデ。	外) 灰白色 HueN8/ 内) 灰白色 HueN8/	精良	図版12-上
13 13 14	杯蓋	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径14.3cm	1/6	外縁は底面から口縁部へと 一段下がるが、内面はほぼ 直線的である。底部は若干 内側へ曲げられる。	底部圓板へ削り。その 他の削板ナデ。	外) 灰色 HueN7/ 内) 灰色 HueN7/	精良	図版12-上
13 13 15	杯蓋	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径12.6cm 高さ 2.5cm	i212完形	体部から腰やかに下方へ下 がり、底部は上方へやや突 き出た後下部へ若干折り返 す。つまみは厚みがあり、 中心が盛り上がる。	底部は削りが明瞭に認め られる。ナデの痕跡が認め られる。	外) 灰色 HueN8/ 内) 灰色 HueN8/	精良	図版11 版用紙
13 13 16	杯蓋	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径11.8cm	残片	外縁は底面から口縁部へと 一段下がるが、内面はほぼ 直線的である。底部は若干 内側へ曲げられる。	削板ナデ。	外) 灰色 HueN6/ 内) 灰色 HueN6/	精良	図版12-上
13 13 17	杯蓋	1-4区 黒褐色シルト 層上	口径12.0cm	残片	体部から低い段をもって下 がり、口縁部へ延びる。端 部は上方へ曲げたもの。下 方へ折り返す。	削板ナデ。	外) 灰白色 HueN8/ 内) 灰白色 HueN8/	精良	図版12-上
13 13 18	杯蓋	2-5区 黒褐色シルト 層上	口径10.6cm 高さ3.15cm	1/4	受け縁は上方へほぼ水平 に延び、立ち上がりは軽く 内傾し、厚い。	外縁部へ削り未調整。 他の削板ナデ。内面底に 不整方向のナデ。	外) 灰白色 HueN8/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	図版13-上
13 13 19	杯身	1-5区 黒褐色シルト 層上	底径 9.3cm	1/2	舟形狀で外側に直むなり付 けの高台を有し、外側に取り 付けの削板が認められる。	底部は削板へ削り。後 の削板により不整方向の キズが残る。企念に施な 作り。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰色 HueN5/	精良	図版12-下
13 13 20	杯身	2-4区 黒褐色シルト 層上	底径 9.3cm	残片	内縁へ並んだ長方形状の疣 台を有す。	底部は削板へ削り。他 は舟形ナデ調整。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	図版12-下 版用紙
13 13 21	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	底径 7.7cm	残片	舟形狀で外側へ覆く貼り付 けの高台を有し、底部から 体部へ大きく傾曲し、直線 的に上方へ延びる。	底部は不整方向のナデ。 他の削板ナデ調整。	外) 灰白色 HueN8/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	図版12-下
13 13 22	杯身	2-2区 黒褐色シルト 層上	底径10.1cm	残片	此級的高く、外側へ直んだ 舟台を有す。底部から体部 へ大きくなじませ、直線的に 上方へ延びる。	舟形ナデ調整。高台貼り 付け部外縁へへらかれて いた痕跡がある。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	図版12-下

番号	器種	出土地区 出土層位	法量	現存	形態の特徴	技法の特徴	色調	給土	備考
13 13 23	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	直径10.9cm	残片	比較的高く、内部へ歪んだ 高台を有す。底部から体部 へ大きく彎曲し、直線的に 上方へ延びる。	回転ナナ調整。高台貼り 付け部外側にヘラが當て られた痕跡がある。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	図版12-下
13 13 24	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径11.6cm 底径2.95cm 高さ 9.3cm	残片	平らな底部から大きく弯曲 し、体部は直線的に延びる。	不整方にキズが残る。 他は回転ナナ調整。	外) 灰白色 HueN8/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	図版12-下
13 13 25	瓶	2-4区 Pt120	口径12.0cm	残片	口縁部でやや外傾する。	回転ナナ調整。	外) 灰色 HueN4/ 内) 灰色 HueN4/	精良	
13 13 26	瓶	2-5区 黒褐色シルト 層上	直径 8.1cm	残片	平らな底部から彎角に彎曲 し、体部を作成。	底部は回転ヘラ削り。他 は回転ナナ調整。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰白色 HueN6/	精良	軽用瓶
13 13 27	瓶	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径13.7cm 底径 7.2cm 高さ 5.0cm	1/2	平高台を有し、体部は緩や かに内傾する。内面に彎い ナナにより5条の筋がある。	底部回転ヘラ削り。他は 回転ナナ調整。	外) 灰白色 HueN8/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	図版11
13 13 28	瓶	2区 開生用漆水槽	直径 9.0cm	残片	底部が厚い平高台で、体部 は外方へ大きく開いている。	底部はヘラ切りの後ナナ 調整。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰色 HueS/	精良	軽用瓶
13 13 29	小鉢	1-6区 黒褐色シルト 層上	直径 4.3cm	1/2	やや高い平高台を有し、内 面はナナにより同心円状の 凹凸がある。	底に余切り痕。他は回転 ナナ調整。	外) 灰色 HueN6/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	図版12-下
13 13 30	瓶(頭部)	2-4区 黒褐色シルト 層上		1/2	体部から頭部へ大きく彎曲 し、上方へ延び、底やかに 開く。外側に直線的に自然 な形がある。	体部に頭部を貼り付ける 内面斜方向のしづら痕有 り。他回転ナナ調整。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	
13 13 31	瓶(頭部)	2-5区 黒褐色シルト 層上		1/3	体部から頭部へ大きく彎曲 し、上方へ延びる。	体部との接合部に複数圧 痕が残る。他は回転ナナ 調整。	外) 灰色 HueNS/ 内) 灰色 HueNS/	精良	図版13-下
13 13 32	瓶(頭部)	2-4区		残片	大きめには蝶形の痕跡に、 把手下部の貼り付け部分が 残存する。	把手の下端を撹でつける。 左右両面は特に剥離され ず、やや丸味をもつてい る。他は回転ナナ調整。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰色 HueNS/	精良	
13 13 33	瓶(把手)	2-2区 黒褐色シルト 層上		把手のみ	上半にやや歪み、底が広く。 全体に丸味を帯びている。	把手より全體に貼り付け る。	外) 灰白色 HueN7/ 内) 灰白色 HueN7/	精良	

番号	器種	出土地区 出土層位	法 量	底容	形態の特徴	技法の特徴	色 調	胎上	備考
四 13 — 34	盤 (底部)	2-2E 黒褐色シルト 層上	底径11.2cm	1/3	外方へ大きく開き、端部で幅の広がる高台を有し、底部は上外方へ丸味をもって延びる。	此盤回転ヘラ削り。他の 回転ナガ調整。	外) 黒色 HueN6/ 内) 黑色 HueN6/	精良	回版11 使用範
四 13 — 35	盤 (底部)	2-2E 黒褐色シルト 層上	底径 7.1cm	1/4	外方へ漸く高台を有し、底部は上方へやや開きながら延びる。内面底にナギによるラセン状の凹凸を有す。	此盤回転ヘラ切り。他の 回転ナガ調整。	外) 黑白色 HueN7/ 内) 黑白色 HueN7/	精良	回版11
四 13 — 36	盤 (底部)	2-3E 黒褐色シルト 層上	底径 7.1cm	1/4	平らな底部で、大きく弧曲し、体器を作ら。	内面は細い回転ナギ。底 部はヘラ切りの様。不整 方向のキズ。外面体部は 回転ナギ。	外) 黑白色 HueN8/ 内) 黑白色 HueN8/	精良	回版12-下
四 13 — 37	甕	2-5区 黒褐色シルト 層上	口径14.8cm	1/5	体部から大きく屈曲し、口 縁部でさらに外寄する。口 縁部は外側へ大きく折り 返し、輪郭いナギにより突 起部を差している。	体部は内面同心円文。外 縁は斜方向に平行タタキ。 他の回転ナガ調整。	外) 黑白色 HueN8/ 内) 黑白色 HueN7/	精良	回版13-下
四 13 — 38	甕	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径15.6cm	残片	壁やかに外寄し、端部付近 でさらに外側へ屈曲する。 端部付近に細い突起が頗り、 帯状にやや突出する。	回転ナガ調整。	外) 黑白色 HueN8/ 内) 黑白色 HueN8/	精良	回版13-下
四 13 — 39	甕	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径11.3cm	残片	体部から大きく外反し、端 部で外側へ折り返し、上部 をつまみ上げる。	回転ナギ調整。	外) 線灰色 HueN3/ 内) 黑色 HueN2/	精良	回版13-上
四 13 — 40	罐鉢	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径 9.4cm	残片	底部は厚く、外側へやや突 き出させ、下部を面取りして いる。体部にはほぼ垂直に延 びる。	底部は回転ヘラ削り。他の は回転ナガ調整。	外) 灰色 HueN5/ 内) 黑白色 HueN6/	精良	回版13-上
四 14 — 41	甕	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径8.4cm	残片	まっすぐ上方へ延び、端 部で折り返し、上部をま んまと上げる。下部はナギによ り鋭く突起する。外縁に斜 方向へのラクラク文字を施す。	回転ナガ調整。	外) 線灰色 HueN3/ 内) 黑白色 HueN7/	精良	回版13-上
四 14 — 42	甕	2-5区 黒褐色シルト 層上	口径9.2cm	残片	体部からやかに屈曲し、 上方へまっすぐ延び、口 縁部で上方へつまみ上げ る。外縁には三条の丸孔に より開けられた上下一組の神 紋工具による列矢文が刻む。	回転ナガ調整。	外) 黑白色 HueN7/ 内) 黑白色 HueN7/	精良	回版14-上
四 14 — 43	甕	2-2E 黄褐色質土下	口径34.4cm	残片	大きく張る体部から上方へ 緩やかに屈曲し、上方へ延 く延びる口縁部をもつ。端 部はほぼ平ら。	内面は細かい同心円文。 外縁は斜方向に平行タタ キ。	外) 黑白色 HueN8/ 内) 黄白色 HueN7/		回版13-下 焼成版
四 14 — 44	器合	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径38.8cm	残片	上方へと内縮し、端部付近 で緩やかに外反させる。内 縁へ折り返すため内側に段 ができる。	回転ナガ調整。	外) 灰色 HueN4/ 内) 黑色 HueN4/	精良	回版13-下

表4 土器

番号	器種	出土場所 出土層位	法 量	残存	形態の特徴	技法の特徴	色 質	胎土	備考
四 四 45	环身 (周み)	2-4区 黒褐色シルト 層上	径 2.7cm 高 1.5cm	残片	上平に最大径をおき、高い、 中央部がナデによりやや突出する。	回転ナデ。	外) 黒色 Hue5YR6/8 内) 緑色 Hue5YR6/8	粘土	
四 四 46	环身	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径35.7cm 底径32.0cm 高 3.0cm	残片	底部から大きく弯曲する。 口縁部に外傾し、内面に 沈線を走らす。	口縁部付近は板ナデ。底 部は指輪圧痕が残る。	外) 黄褐色 Hue9YR8/4 内) 淡黄褐色 Hue7.5YR8/3	粘土	四版15-上 I類
四 四 47	环身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径33.7cm 底径 9.3cm 高 2.7cm	1/5	底部から腰やかに弯曲し、 口縁部内面に沈線を走ら す。	口縁部付近は板ナデ。底 部は指輪圧痕が残る。	外) 明赤褐色 Hue5YR5/8 内) 明赤褐色 Hue5YR5/8	粘土	四版15-上 I類
四 四 48	环身	2-2区 黒褐色シルト 層上	口径32.6cm 底径10.0cm 高 2.7cm	残片	底部から腰やかに弯曲する。 口縁部に外側にナデによる 傷かなぐれを有し、内面に 沈線を走らす。	口縁部付近は板ナデ。底 部は指輪圧痕が残る。	外) 黄白色 Hue7.5YR8/2 内) 所有色 Hue7.5YR8/2	粘土	四版15-上 II類
四 四 49	环身	2-2区 黒褐色シルト 層上	口径33.8cm 底径 9.6cm 高 3.1cm	1/4	底部から腰やかに弯曲する。 口縁部に外側のナデによ り外側にやや外傾し、内面 に沈線を走らす。	口縁部付近は板ナデ。底 部は指輪圧痕が残る。	外) 黄色 Hue5YR7/6 内) 淡褐色 Hue5YR8/4	粘土	四版11 II類
四 四 50	环身	2-2区 黒褐色シルト 層上	口径33.8cm 底径 9.5cm 高 3.2cm	1/2	底部から腰やかに角をもって 弯曲する。口縁部内面に 沈線を走らす。	口縁部付近は板ナデ。底 部は指輪圧痕が残る。	外) 黄色 Hue5YR7/6 内) 淡褐色 Hue5YR8/4	粘土	四版2- 層の白 色砂質 含む
四 四 51	环身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径44.7cm 底径30.6cm 高 2.9cm	残片	腰やかに弯曲する。口縁部 内面に沈線を走らす。	口縁部付近は板ナデ。	外) 黄色 Hue5YR6/8 内) 黄色 Hue5YR7/6		II類
四 四 52	环身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径34.1cm 底径30.0cm 高 2.8cm	残片	腰やかに弯曲する。口縁部 内面に沈線を走らす。	口縁部付近は板ナデ。	外) 黄色 Hue5YR7/6 内) 明赤褐色 Hue5YR8/8	粘土	II類
四 四 53	环身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径34.2cm 底径31.6cm 高 2.8cm	残片	底部から大きさく弯曲する。 口縁部内面に沈線を走ら す。	口縁部付近は板ナデ。底 部は指輪圧痕が残る。	外) 黄色 Hue5YR6/8 内) 明赤褐色 Hue5YR8/8	粘土	四版15-上 II類
四 四 54	环身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径34.0cm 底径 8.7cm 高 2.8cm	残片	全体に浅く、腰やかに弯曲 する。口縁部内面に沈線 を走らす。	口縁部付近は板ナデ。底 部は指輪圧痕が残る。	外) 淡褐色 Hue5YR8/4 内) 淡白色 Hue6YR8/4	粘土	四版11 II類
四 四 55	环身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径32.8cm 底径 9.6cm 高 2.8cm	1/4	全体に浅く、腰やかに弯曲 する。口縁部内面に沈線 を走らす。	口縁部付近は板ナデ。底 部は指輪圧痕が残る。	外) 淡褐色 Hue5YR7/4 内) 淡白色 Hue6YR8/1	粘土	II類

番号	器種	出土施設 出土層位	法 番	残存	形態の特徴	技法の特徴	色 調	胎土	備 考
四 15 - 56	杯身	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径13.3cm 底径9.6cm 器高 3.6cm	2/3	底部は若干凸凹があるが、 ほぼ平んで、縁やわに弯曲し、 口部を形成する。口縫部 内部に沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 深褐色 Hue5YR8/3 内) 深褐色 Hue5YR8/4	径2mm 底の白 色砂粒 含む	国版II II類
四 15 - 57	杯身	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径14.7cm 底径10.4cm 器高 2.6cm	1/3	底部は若干凸凹があるが、 ほぼ平んで、縁やわに弯曲し、 口部を形成する。口縫部 内部に沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 暗色 Hue5YR6/6 内) 暗白色 Hue5YR6/2	粗良	国版II II類
四 15 - 58	杯身	2-5区 黒褐色シルト 層上	口径15.1cm 底径11.5cm 器高 3.0cm	1343(史跡)	若干不規則のある底から縁 やわに弯曲し、上方の斜 面に直線的に延びる。口縫 部は外側のナデより外 方へ広がる。内部に沈線を 巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 暗色 Hue5YR6/8 内) 深褐色 Hue5YR8/4	粗良	国版II II類
四 15 - 59	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径13.7cm 底径9.6cm 器高 3.2cm	残片	底部から大きく述曲し、半 円内側ながら口縫部を 形成する。端部は外側部に 沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 暗色 Hue5YR6/8 内) 明赤褐色 Hue5YR5/8	粗良	国版I上- II類
四 15 - 60	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径13.1cm	残片	底部から縁やわに弯曲し、 口縫部でやや外側にする。 内外表面に沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 暗色 Hue5YR6/8 内) 明赤褐色 Hue5YR5/8	粗良	IV類
四 15 - 61	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径15.7cm	1/6	全体に洗く、底部から上方 へ直線的に延びる。口縫 部内部に沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 暗白色 Hue5YR8/1 内) 暗白色 Hue5YR8/2	粗良	国版II IV類
四 15 - 62	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径13.7cm 底径11.0cm 器高 2.3cm	残片	全体に洗く、底部から上方 へ直線的に延びる。縁部 やや内側に反させり。内部に 沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 深褐色 Hue5YR8/3 内) 暗色 Hue5YK7/6	粗良	IV類
四 15 - 63	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径12.8cm 底径8.0cm 器高 3.1cm	残片	底部から縁やわに弯曲する。 口縫部でやや内側し、縁部 では直線的に上方へ延 びる。内部に沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 暗白色 Hue5YK8/2 内) 暗白色 Hue5YK8/2	粗良	国版I下- IV類
四 15 - 64	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径14.7cm 底径10.0cm 器高 2.4cm	1/6	底部から縁やわに弯曲する。 口縫部でやや内側し、縁部 では直線的に上方へ延 びる。内部に沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。底 部は指圧痕が残る。	外) 深褐色 Hue5YR8/3 内) 深褐色 Hue5YR8/4	粗良	国版I下- IV類
四 15 - 65	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径15.6cm	残片	無いナデによる無い型が2 条あり。口縫部内部に沈線 を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。 (外縫やや深い)	外) 暗色 Hue5YR8/8 内) 暗色 Hue5YR8/8	径2mm 底の白 色砂粒 含む	国版I下- IV類
四 15 - 66	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径11.8cm	残片	やや内側し、口縫部で2 條直線的に延び、内部に 沈線を巡らす。	口縫部付近は横ナデ。	外) 深褐色 Hue5YR8/4 内) 深褐色 Hue5YR8/4	粗良	IV類

番号	部位	出土地区 出土地名	法量	残存	形態の特徴	地表の特徴	色調	粘土	備考
四 15 67	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径24.8mm 底径10.6mm 高さ 2.8cm	残片	やや内側し、口縁部では ば直角的に傾き、内面に沈 殿を走らす。	口縁部付近は横ナギ。 底部は指揮压痕が残る。	外) 深褐色 Hue5YR8/4 内) 青色 Hue5YR7/6	精良	IV類
四 15 68	杯身	2-3区 黄色土下	口径13.7mm 底径 8.8mm 高さ 2.2cm	残片	全体に窓あり。底部から上外 方へ直角的に延びる。口縁 部内面に沈殿を走らす。	口縁部付近は横ナギ。底 部は指揮压痕が残る。	外) 深褐色 Hue5YR8/3 内) 深褐色 Hue5YR8/4	精良	四區15-下 IV類
四 15 69	杯身	2区 陶器用排水溝	口径13.6mm	残片	縦やかに内側し、口縁部 付近で若干外傾する。口縁 部内面に沈殿を走らす。	口縁部付近は横ナギ。 底部は指揮压痕が残る。	外) 深褐色 Hue5YR8/4 内) 深褐色 Hue5YR8/4	精良	四區15 下 IV類
四 15 70	杯身 (底部)	2-3区 黒褐色シルト 層上	直径 9.8mm	1/2	底部が凹面による調査のた め、今や落ち込んだように 下方へ突出し、口縁部へは 直角的に延びる。	口縁部付近は横ナギ。底 部は指揮压痕が残る。	外) 深褐色 Hue5YR8/4 内) 灰白色 Hue7.5YR8/1	精良	
四 15 71	杯身	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径12.4mm 底径 5.2mm 高さ 3.1cm	1/4	底部が凹面による調査のた め、今や落ち込んだように 下方へ突出し、口縁部へは 直角的に延びる。	口縁部付近は横ナギ。底 部は指揮压痕が残る。	外) 灰白色 Hue7.5YR8/2 内) 灰白色 Hue7.5YR8/2	精良	四區11
四 15 72	杯身 (底部)	2-4区 黒褐色シルト 層上	直径 6.8mm	残片	平らな底部から、外方へ開 く。	底部は圓軸あたりにより なり縮される。他は直線 ナギ。	外) 灰白色 Hue7.5YR8/2 内) 灰白色 Hue7.5YR8/2	精良	-
四 15 73	高杯	1-6区 黒褐色シルト 層上	周径19.5mm	2/3	7面に面取りされる。底部 は下方へと縦やかに斜めし、 底部へ内側へ若干斜り立 てている。	面取りは下から上へ傾る。 内側にしづらぎの痕跡があ る。他は直線ナギ。	外) 灰白色 Hue7.5YR8/2 内) 青色 Hue5YR7/6	精良	四區11
四 15 74	皿	2-4区 黒褐色シルト 層上	口径16.6mm 底径10.1mm 高さ 2.4cm	残片	底部が直脚でなく、縦らか に斜めする。底部で大きく 外反する。	口縁部付近は横ナギ。底 部は指揮压痕が残る。	外) 青色 Hue2.5YR6/8 内) 青色 Hue5YR7/6	精良	四區15-上 I類
四 15 75	皿	2-5区 黒褐色シルト 層上	口径18.2mm	残片	底部で大きく外反し、内面 へ若干斜り立っている。	口縁部付近は横ナギ。 底部は指揮压痕が残る。	外) 明赤褐色 Hue2.5YR6/8 内) 青色 Hue5YR6/6	優良 径 2 mm の白 色砂粒 含む	I類
四 15 76	皿	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径16.5mm 底径12.4mm 高さ 1.8cm	残片	深い直脚から縦やかに斜め し、底部で内側へ大きく折 り返し、丸く仕上げている。	口縁部付近は横ナギ。 底部は指揮压痕が残る。	外) 赤灰色 Hue2.5YR6/1 内) 赤灰色 Hue2.5YR6/1	精良	四區15-下 IV類
四 15 77	皿	2-5区 黒褐色シルト 層上	口径18.8mm 底径19.4mm 高さ 2.0cm	1/6	底部から大きく直脚し、口 縁部付近で外側へ大きい沈 殿(1.1具)が残る。	口縁部付近は横ナギ。底 部は指揮压痕が残る。	外) 明赤褐色 Hue2.5YR6/8 内) 青色 Hue5YR7/6	精良	四區11 II類

番号	器種	出土地区 出土層位	法量	残存	形態の特徴	技法の特徴	色調	粘土	備考
四 15 78	輪	1-5区 黒褐色シルト 層上	口径15.0cm	残片	縁やかに寄合し、口縁部 で中央外方へ開く。	外縁は指標による調整の 後微ナメ。内面は微ナメ 調整。	外) 淡黄褐色 Hue7.5YR8/3 内) 淡黄褐色 Hue7.5YR8/3	精良	
四 16 79	盤	1-5区 黒褐色シルト 層上	口径29.1cm	残片	体盤から縁やかに外反し、 口縁部で内側へ若干傾り 込す。	外縁体盤は輻方向に6本 /1cmのハケ目が残る。他 は面取ナメ調整。	外) 淡褐色 Hue2.5YR4/8 内) 淡褐色 Hue2.5YR4/8	精良	直径14-17
四 16 80	盤	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径18.5cm	残片	縁部が全体に薄い。体盤か ら大きく「く」の字形に屈 曲する口縁部で、端部で若干 上方へ引き上げる。	外縁体盤はハケ目が残る。 他は面取ナメ調整。	外) 淡黄褐色 Hue7.5YR5/2 内) 明褐色 Hue7.5YR5/2	径3mm 程の砂粒多く 含む	
四 16 81	盤	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径18.7cm	残片	体盤から「く」の字形に屈 曲し、口縁部は短く、端部 は丸く收める。	体盤外縁に輻方向のハケ 目が痕跡が認められる。 他は面取ナメ調整。	外) 明褐色 Hue2.5YR5/8 内) 淡黄褐色 Hue7.5YR4/4	径1mm 程の砂 粒多い	
四 16 82	羽釜	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径22.6cm	1/6	平らな口縁部のはば直下に 厚大きな脚を施り付ける。 体盤はほぼ垂直である。	面取ナメ調整。	外) にじい褐色 Hue5YR7/4 内) にじい褐色 Hue5YR7/4	径1mm 程の砂 粒多い	直径14-17
四 16 83	羽釜	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径31.8cm	残片	縁やや広がる脚を有し、 体盤はやや内凹する。	面取ナメ調整。	外) 黒白色 Hue7.5YR8/2 内) 淡褐色 Hue5YR8/4	径1mm 程の砂 粒が多い	直径14-17
四 16 87	片口鉢	2-3区 黒褐色シルト 層上	口径13.3cm	残片	外方へ大きく広がる口縁部 で、口は先端をもった三角 形に突出する。	外縁にハケ状のキズがある。	外) 暗灰色 Hue7.5YR4/1 内) 稕色 Hue7.5YR7/8	径1mm 程の砂 粒多い	

表 5 緑釉陶器

番号	器種	出土地区 出土層位	法量	残存	形態の特徴	仕法の特徴	色調	胎土	備考
国17-88	碗か杯	2-3区 馬鹿色シルト層上	直径 6.8cm	1/2	高台は外方へ踏み出る。高台部の端部は水平方向につまみ出る。底部は縦椭心底に削り出す。	粘土縫を巻き上げ、ロクロナダ、ロクロ削りにより調整する。高台を強いナダにより貼り付け、内外面とも緑釉を施す。	外) 黄緑色 内) 黄緑色	精良	国版16-上
国17-89	碗か杯	2-3区 馬鹿色シルト層上	直径 6.4cm	1/2	高台の断面形は四角形、高台外縁ナダによる内曲面。	粘土縫を巻き上げ、ロクロナダ、ロクロ削りにより調整する。高台を強いナダにより貼り付け、内外面とも緑釉を施す。	外・内面とも精耕済。	精良	国版16-上 底部外周露胎?
国17-90	碗か皿	2-3区 馬鹿色シルト層上	直径 7.4cm	1/4	高台は削り出し。比較的小さく底へ高台。底はガラス質。	粘土縫を巻き上げ、ロクロナダ、ロクロ削りにより調整する。高台は削り出し、内外面とも緑釉を施す。高台量付の輪郭を残す。	外) 墓緑色 内) 墓緑色	精良	国版16-上
国17-91	碗	1-5区 馬鹿色シルト層上	口径 5.2cm	1/3	高台は平高台または蛇の目高台。	粘土縫を巻き上げ、ロクロナダ、ロクロ削りにより調整する。高台を強いナダにより貼り付け、内外面とも緑釉を施す。底部外周はロクロ削り。	外) 淡灰緑色 内) 淡灰緑色	精良	国版16-上

表 6 白磁

番号	器種	出土地区 出土層位	法量	残存	形態の特徴	仕法の特徴	色調	胎土	備考
国17-92	碗	2-3区 馬鹿色シルト層上	口径34.2cm	残片	口縁部丘錐状に肥厚、表面に気泡、貫入有り。	内外面に施釉。	外) 黄白青色 内) 黄白青色	精良	国版16-下
国17-93	碗	2-4区 馬鹿色シルト層上	口径37.3cm	残片	口縁部丘錐状に肥厚、表面に気泡。	内外面に施釉。	外) 黄白色 内) 黄白色	精良	国版16-下
国17-94	皿	2-4区 馬鹿色シルト層上	口径10.2cm	残片	口縁部外縁に段をもつ。	内外面に施釉。	外) 黄白色 内) 黄白色	精良	国版16-下
国17-95	碗	2-4区 馬鹿色シルト層上	直径 5.4cm	残片	幅が狭く、比較的高い高台。内面に施釉。外面部膨らみ内面に1条の比較的。	内面に施釉。外面部膨らみ内面に1条の比較的。	外) 黄白色 内) 黄白色	精良	国版16-下

表 7 黒色土器・瓦器

番号	器種	出土地区 出土層位	法量	残存	形態の特徴	仕法の特徴	色調	胎土	備考
国17-96	碗か皿	2-4区 馬鹿色シルト層上	直径 8.0cm	残片	高さの低い三角形状の高台を貼り付け。体部は外方へ大きく削り出す。	内面底部に同心円状に墨書きされたやや規範な壇文が認められる。	外) 黒色 Hue7.5YR2/6 内) 黑色 Hue2.5YR2/1	精良	
国17-97	碗か皿	2-4区 馬鹿色シルト層上	直径 5.8cm	残片	貼り付け高台。高台の断面跡は白色。	粘土縫を巻き上げ、ロクロナダ、ロクロ削りにより調整する。高台を貼り付け、模ナダにより調整する。	外) 黄白色 Hue7.5YR2/2 内) 黄白色 Hue7.5YR2/2	精良	

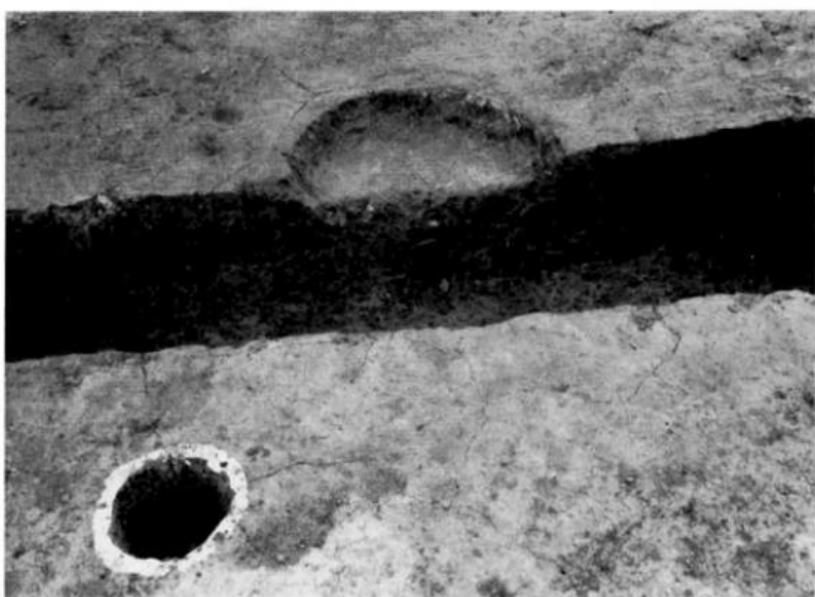
図 版



上) 調査区全景 (北東より)



下) 1区 遺構検出状況 (南より)



上) 1区 ピット21(北より)



下) 1区 土層堆積状況(東南より)



上) 2区 連構検出状況（南西より）



下) 2区 摶立柱建物検出状況（北より）



上) 2区 柱穴4, 5 断ち割り (南西より)



下) 2区 柱穴13 断ち割り (南より)



上) 2区 遺物出土状況(70.76.87:西より)



下) 2区 土層堆積状況(西より)



上) 3区 全景(北より)



下) 3区 土層堆積状況(北東より)



上) 4区 遺構検出状況(南より)



下) 4区 轶(1)出土状況(北より)



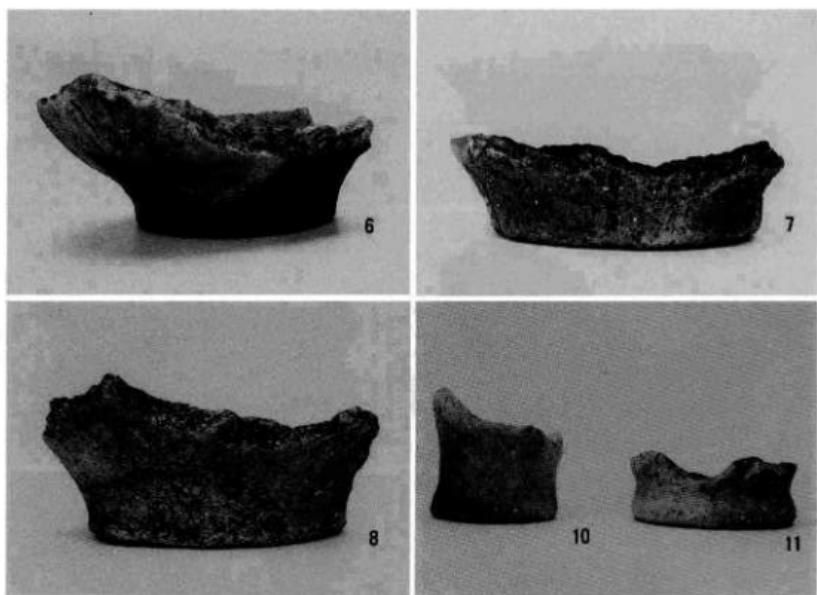
出土土器(1) (弦纹土器)



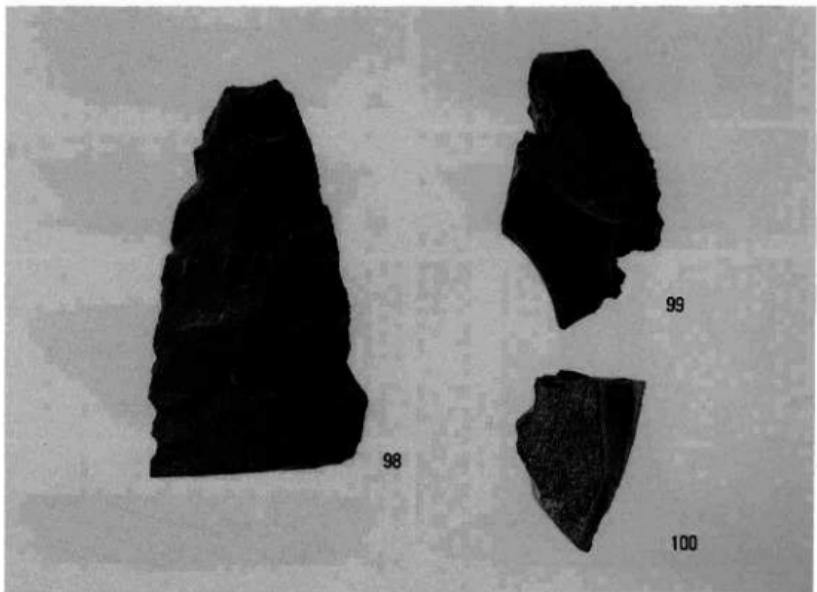
上) 出土土器(2) (弥生土器)



下) 出土土器(3) (弥生土器)



上) 出土土器(4) (弥生土器)



下) 出土遺物・石器 (弥生時代)



15



27



34



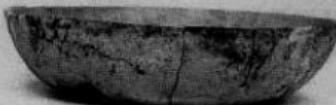
35



49



54



56



57



58



61



71

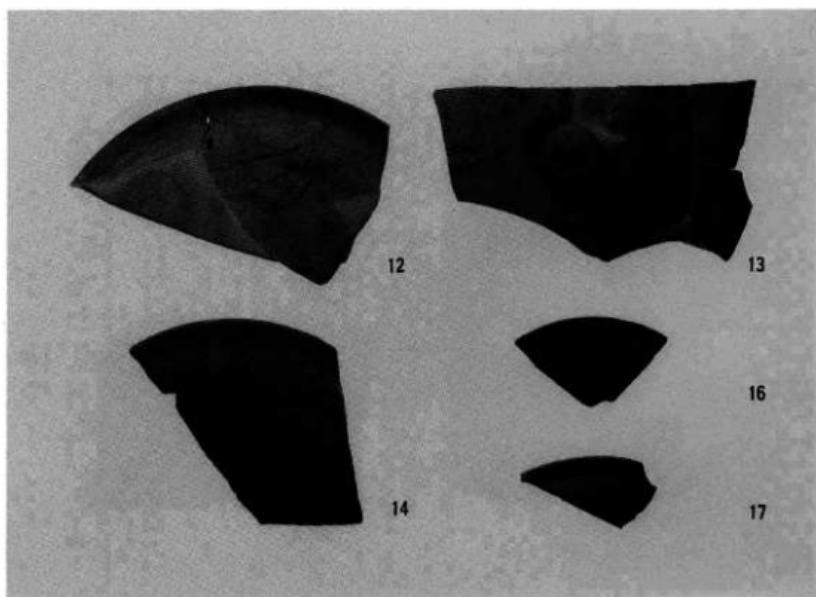


73

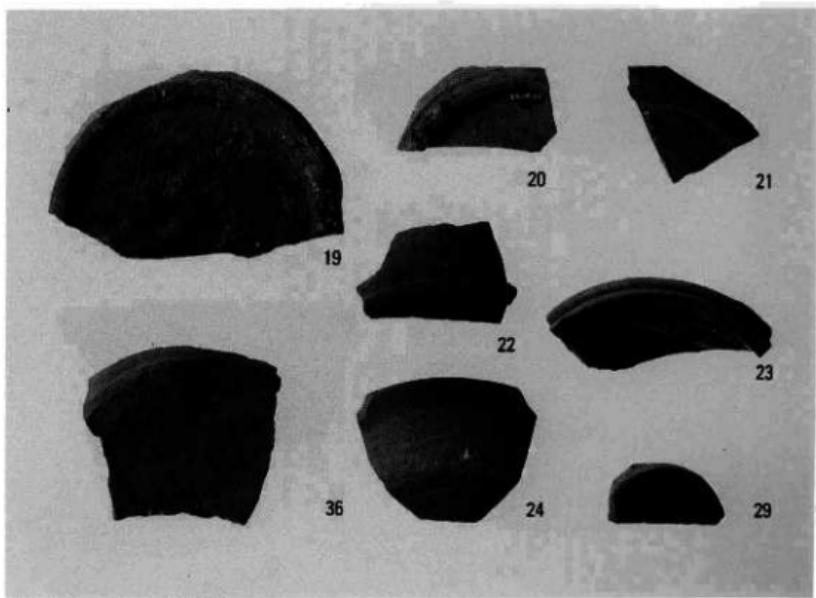


77

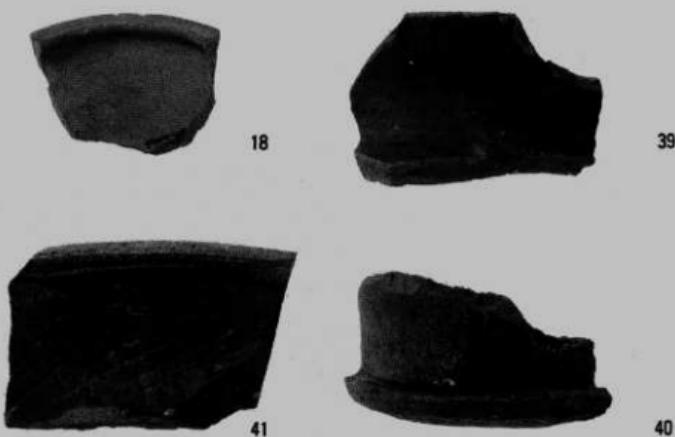
出土土器(5)（須恵器・土師器）



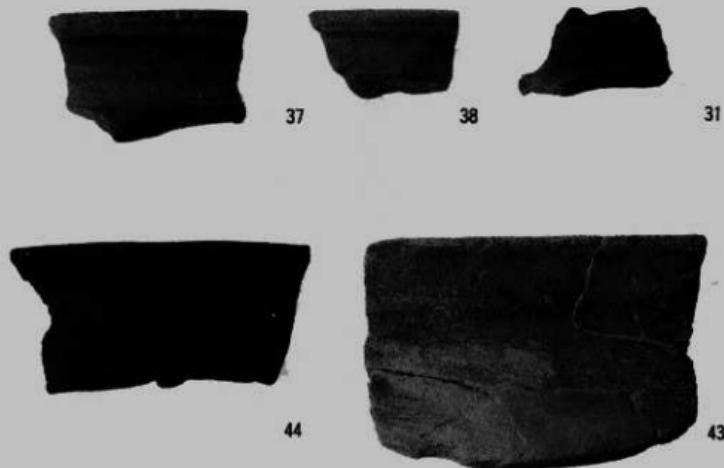
上) 出土土器(6) (須恵器)



下) 出土土器(7) (須恵器)



上) 出土土器(8) (須恵器)



下) 出土土器(9) (須恵器)



42

上) 出土土器⑩ (須底器)



82



79

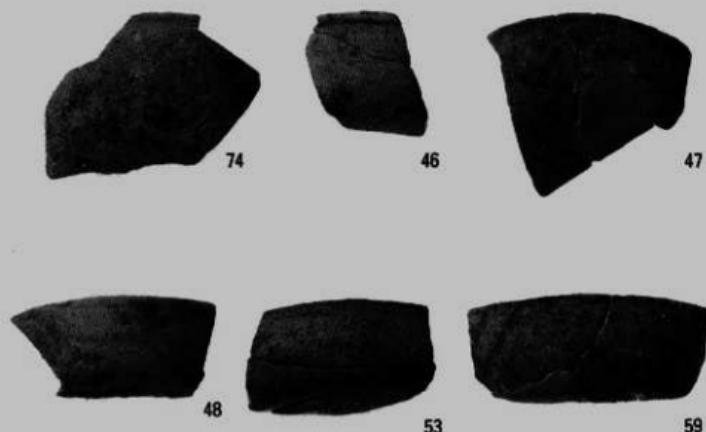


83

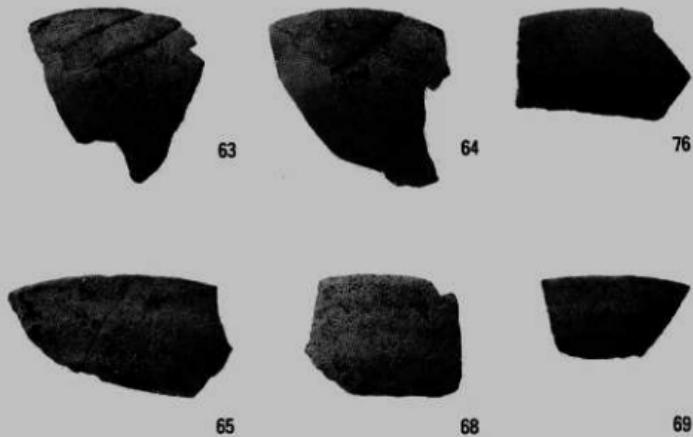


84

下) 出土土器⑩ (土師器)



上) 出土土器(1) (土師器)



下) 出土土器(2) (土師器)



88



89



90

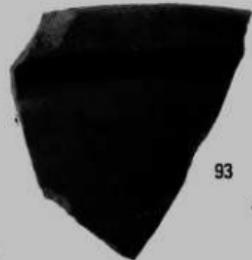


91

上) 出土土器14 (綠釉陶器)



92



93

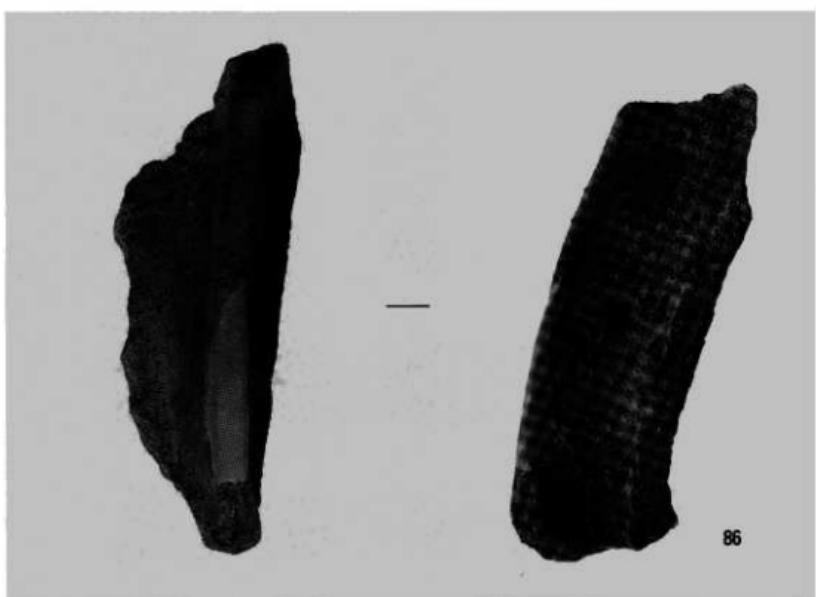


95

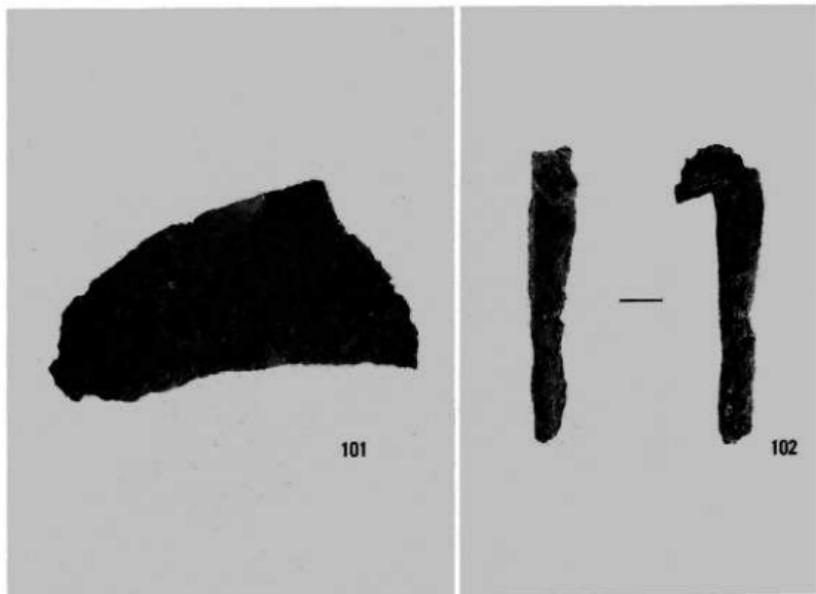


94

下) 出土土器19 (白磁)



上) 出土遺物・陶



下) 出土遺物・鐵器



103



104



105



106



上) 出土遺物・土錘、砾石



107



108

下) 出土遺物・柱

尼崎市 兵庫県文化財調査報告書 第84冊

東 武 庫 遺 跡

県公営住宅尼崎武庫之荘団地改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年3月発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL.(078)531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL.(078)341-7711

印刷 光印刷株式会社
